
-NARUTO-転生

莓リズム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- NARUTO - 転生

【Nコード】

N3046W

【作者名】

莓リズム

【あらすじ】

目が覚めたあたしはなぜか、変な人に話しかけられて・・・？
??

原作&キャラほぼ崩壊!!

少しグロイです^m^

プロローグ(前書き)

原作&キャラほぼ崩壊です。

ナルト詳しくないのでダメだしはやさしくお願いしますm()m

でわ()ぎ() * ^ ^ () v

プロローグ

あたしは椿山 おはな

目が覚めたら意味わかんない場所にいた。

えッ??何???

体ないんだけど!!

でも耳聞こえるし目は見えるし・・・どっなってんの???

? 「あッ! 起きたあ???

! ! ! ! !

おはな「誰! ! !」ど! ! ! そしてあたしどっなってんの???

? 「私は女神と思ってねえ! ! ! ここは私の家! ! 体の事は気にしな

いでえ〜」

つっこんでいいですか？

思えねーよ！！

なんであたしあんたの家いるわけ？

気にスンナって気にするだろ普通！！！！

女神「あ！！説明するから落ち着いて」

心の声まで聞こえるんだ・・・

少し安心。

てかなんでつけてんの？

女神「まず、あなたは死にました。」

おはな「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・」

女神「けどあなた・・・・・・・・病気で死んじゃって好きな事できなかったでしょ??？」

確かにそうだ。

15年間、生まれつき体の弱かったあたしはずっと家の中でこもっていて、発作が起きてはいけなから

走れなかったし、寝たきりだった。

女神「少しかわいそうだと思って・・・あなたかわいいのに・・・」

そこ???

女神「だから、あなたを転生させちゃいます!」

は???

女神「体と顔と髪はそのままね?希望があったら言って!!それで
転生の場所はナルトの世界!!」

ええーーーー???

勝手に決められてんの???

ナルトは少し知っている。
前世の時読んでたから・・・

まあ・・・希望を言っている。

おはな「えっと・・・名前はそのままね!!体とかは同じでいいけど、髪は色そのままで、落ちる時はショートヘアがいい!!」

女神「どんな感じの??」

そういつてカタログを見せてきた。

ボブだ!!

おはな「ボブがいい！あと前髪はそれと同じでのびないようにしてて！！」

女神「前髪はのびないようにと・・・んで何の力がほしい??」

おはな「んーと強くてなんでもできる能力と火影・・・木の葉の忍びがいい!！」

女神「O\K!!服もカタログから選んで!！」

短い浴衣のピンクにした。

女神「連載の4年前に落とすよ。年はナルトと同じね?必要品はあとで落とすからね?じゃいっといで〜」

連載の4年前って・・・

多分9歳になの???

あれ？？足元が・・・

おはな「きゃあああああああ
」

女神とかいう人！！！！

空から落とすなんてひどくない！！！！？？？

次会ったら一発殴らせてもらっからねッ!!!!

プロローグ(後書き)

感想をくれればうれしいです) * ^ ^ ^ (^ ^ ^ v

落っこちた(前書き)

学生なんで土日か連休ぐらいしか更新できません。

ご了承くださいm() m

落っこちた

「ひゃあああああ……！！！！！！！！！！」

マジかよー！！

死んだばかりだけどマジで死ぬんじゃね???

落ちてる途中だけど着物とか髪を見た。

髪の色はきれいな茶色でけっこう気に入った。

ちよー……!!……!!

ズジズジザザ……!!

下なんか地面もつ見えてきたし!!……!!

そーだ!!

能力でなんかしたら助かるんじゃない???

うーんと・

確かこんな感じだったかなあ??

おはな「忍法!!って間に合わねー!!!!」

もうダメじゃー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

おはな「きやあああああ！…！」

覚悟をして目をつぶった。

あれ???.???.?

.....

ドーンとかいう効果音は???

目を開けたら………なんと!!

サスケが助けしてくれたのでわないか!!

姫さん抱っこですかああ???

は……恥ずかしい……

サスケ「大丈夫か??？」

おはな「いや・・・あの・・・すみません!!--!!--重いでしょ?？」
おろしてくれていいよ?？」

おろしてくれたけどなんか顔見てくる・・・

なんかついてんのかな??？」

周りになんか人がいっぱいいる……

いるか先生「サスケよくやった。えーと君・・けがない?」

おはな「あ・・はい。大丈夫です。」

サスケ「なんの術を使おうとしたんだ??」

おはな「あ……どこですか??木の葉の忍びですよね?」

いるか先生「ああそつだ。簡単に言つとここは忍者アカデミーだな。」

サクラ「敬語はやめて。あたし春野サクラ。あなたは??？」

おはな「椿山 おはな。よろしくね。」

内なるサクラ「外見も名前もかわいいじゃん！！チャクラもスゴイ
し……

サスケ君絶対おはなの事好きに……」

おはな「サクラも十分かわいいと思うよ?。」

サクラは凶星で小声で聞こえてるの?と聞いた。

おはな「今のは聞こえやすいのだったから……」

んで火影様に挨拶して許可をもらった。

明日からアカデミーに行くことになった。

家はアパートにしようと思ったけど、1人になると上から大きい靴が2、3個落ちてきた。

中は生活用品と、布団とか入っていて、お金がこっちの世界では100億入っていた。

なので一番高いアパートを一括で買った。

家に行ってベットやテーブルなどを配置した。

明日が楽しみだなあ？

キツネ・・・いや九尾！！

まず・・・起きたけど・・・

大変な事に気が付いた。

アカデミーの場所・・・どこ???

まず、町つーか人気のあるところに行き、人に尋ねることにした。

あれ????ナルト?????

どーやらいたずらをしてお店の人をこまらせていたようだ。

ちゃーんす！

おはな「チエストーオ！！！！！！」

ナルト」「ぶほおー!!」

必殺!!飛び蹴り!!

おはな「ナルト!!何してんのよ!!すいません。許してやってください。お前も謝れ!!」

ナルト「いった!!...ごめんなさい。」

店の人は笑って許してくれた。

ナルト「なんだってばよ!!..」

おはな「アカデミーの場所わかんないから教えて。」

ナルトはしぶしぶ連れていってくれた。

おはな「なんでイタズラするの??」

ナルト「……俺ってばよ……友達いねえからよ……」

おはな「そんなことしても、友達できないよ???あたしが友達になるから、イタズラ……もうやめてね。」

ナルトは嬉しそうにアカデミーまで走った。

で
教室

サクラ「おはよう。おはな!」

おはな「おはよう。」

内なるサクラ「おはなといれば、サスケ君と仲良くなれる!!ナルトがいるけど・・・」

サクラ「あんた、なんでおはなといるの??」

ナルト「おはながアカデミーの場所分らないって・・・それと俺と友達になってくれたってだよ!!」

サスケはカチンときたようで・・・

てかなんで怒ってるんだろっ・・・

サクラ「おはなは鈍感ていうか鈍いのね・・・その辺は・・・」

おはな「?????どういつこと??サスケやいのとかも友達でしょ?
?」

みんななんでため息ついてんの???

いるか先生「おはよう!!おはなは空いてる席座れ!!」

おはな「空いてる場所・・・サスケの隣ね。」

いのとサクラが落ち込んでる・・・なんでかなあ??

今日は陰分身の術らしい・・

サスケがコツを教えてくれた。

んでやってみる。

ぽぽん!!

おお!!

戻るとナルトは格闘してた。

おはな「何してんの??」

ナルト「この術一番嫌いだったよ・・・」

おはな「チャクラが乱れてるわよ??あせったらダメ。落ち着いて集中するの。」

ナルト「落ち着いてっと・・・陰分身の術!!」

ぼぼん!!

ナルト「できたっばよ!」

おはな「おめでとー!」

その夜

ナルト「いやー！！初めてできたっばよ！」

おはな「あんたサクラに好かれたいんだったらイタズラやめなさいよ??？」

ナルト「分かってるてばよ!!!」

次の瞬間だった。

ナルトがいきなりキツネになった。

おはな「・・・え????ナルト?？」

暴れだす。

やばい!!--けっこづでかい!!--

ガ
シ
ユ
ッ
！
！

おはな「ぎゃあああああ」！

右手が引っかかれた。

でかいから腕の所ぎりぎりだから腕の下は動かせるけど、上は傷で動かない。

血の量も半端ない。

このままだと出血大量で死ぬ！！

いるか先生「どうした？？おはな！！」

火影様とその他の先生が来た。

おはな「あのね、ナルトが急にキツネになって……引つかかれたの。」

火影「九尾じゃな……おはな、ナルトだってことは内緒じゃ。もちろん本人にも。
みな！！ナルトを止めよ！！」

そのあと、サクラやサスケが来た。

サクラ「腕……大丈夫??あれはキツネ??」

火影「サクラ！サスケ！おはなを病院に連れて行け！！」

「はい。」

そこから意識がなくなった。

ヘタすぎだろ!! (前書き)

おひさ^^

眠い・・・

けど更新するわし・・・

(T—T)

ヘタすぎだろー！

おはな「うーーん……」

どことだ「……」？

おはな「イタッー！」

右手の上ら編が包帯を巻かれてる。
そして地味に痛い。

べつから睡じゃなかったようだ。

.....

アメリカンジョークじゃないのか.....

横を見ると、ナルトがベットにいた。
ナルトは頭だの、腕だの包帯の量が半端ない。

重症じゃねーか！！！おい！！

しばらくするといるか先生が来た。

そして、屋上に行く。

いるか先生「腕はどうだ？」

おはな「さぁ・・・でも予想だとしばらく使えなさそう。」

いるか先生「あのな・・・ナルトが九尾だってことはナルトに言っ
ちやだめだぞ。掟になったしな。」

おはな「分かってる。じゃああたしも腕がナルトのせいで使えない
とかいうのも

言っっちゃだめだよ。」

いるか先生「火影様に話して置くよ。」

で次は医者からの呼び出し。

なんなんだよ!!

呼び出しがききだろ???

医者「右腕の事ですが・・・手術するにはまだ早いです。」

・・・

何???

このベタな感じ・・・

悪かったな!!!

by 作者

あの体力が足りないからでしょ。

医者「あと6年になったら大丈夫っでしょう。」

疾風伝始まる1年前やないか!!

そうしくんだんだよ!!

b
y
作者

でベットに戻って女神に話した。

女神「なんか大変な事になっちゃったね。でも治せないや」

ああーそうかい。

女神「まあ・・・ガンバ！それじゃ。」

えええ????

それで終わらす気!???

マジかよー—————!!

元々右利きだったあたしは肩が使えないからクナイで跳ね返したり
はできるけど、
左利きになれるよう練習しなければならないのだった。

お箸も???

クナイも??

鉛筆とかも???

9歳の子にんなのできるか———!!———!!

横で何にもしらないナルトが寝てる……

「はぁ・・・まあ頑張る!!」

「どうやってだよ!!」

ナルト「ん・・・」

目が覚めた!!!!!!!!!!

おはな「おはよー!!ナルト!!」

ナルト「おはよー!!おはなその腕どうしたんだってばよ??」

うわー！ー！ー！

コイツさっそく痛いといっついてきたー！ー！

おはな「ちょっと事故ったの。」

ナルトの頭なら騙しとおせる！ー！

ナルト「そうなのか。」

ほら見る。

しばらくすると、サクラとサスケが見舞いに来た。

ナルト「サクラちゃんーん？」

サクラ「あんたの見舞いじゃないわよ!?!おはなの見舞いよ!?!」

ストレートに言った!!

あーあけっこう落ち込んでるよお???

サスケ「大丈夫か??」

おはな「うん。けど手術するには6年待ってて。」

サクラ「それ・・・大丈夫って言わないんじゃない??」

サスケ「かなり重症だな・・・」

おはな「まあ、1週間したらアカデミーに戻るつもり。」

ナルト「俺もってばよ!」

ベタすぎだろ!! (後書き)

次回一気に四年後・・・原作が始まる!

・・・かも (<|>)

女神勝手すぎだろ!! (前書き)

はい!!

いきなり原作に飛び込みます!!

年月もすぎますが・・・。

女神勝手すぎだろ！！

あれから、4年たった。

成長っていつても、髪は前のまま。
背は少し伸びて、左利きになった。腕は包帯をしている。

んである口の事。

あたしが買い物しよつと歩いてるとイタズラしよつとしているナル
ト発見！

おはな「何しとんじゃあ!!!!」

必殺!水びたしの術!!

勝手に作った術です。ニートすぎます。女神からもらったなんてもあり能力っす!!

ナルト「つ……冷たい……」

おはな「また、ラーメン屋のおっちゃん困らせて……謝れ!!」

ナルト「ごめんなさい……ってかおはなお前今日アカデミー休むんじゃない?」

おはな「病院帰りに、買い物しようと思ったの!!」

で別れて家に帰ると、女神が話かけてきた。

女神「お久ー！強いの！修行してんのね。」

おはな「何の用??」

女神「実はですね・・・書類にジュースこぼしてしまいました、あなたのここに落ちる前の記憶ができてしまい、しばらくしたら会うことになってる白という男の子があなたと双子という設定に・・・」

おはな「何しれくてんの!??つか苗字違うし!」

女神「それはあたしが白の苗字を椿山にしといたから大丈夫!」

おはな「ええええええ??」

女神「白と過ごしたあたしが作った記憶を今から入れまーす!」

おはな「ちょ……そんな勝手に……」

ぽん！！

白という顔、
お母さん、
悲しい事実・
・
・

全部入ってきた。

ってか、勝手すぎる・・・

家を飛び出して森に行く。

女神が作った過去といえども、こんな過去悲しすぎる・・・

涙が出てきてしまった。

落ちてきて……いや、この忍びにきて初めて泣いたかも。

白に早く会いたい。

しばらくしたら会えるけど・・・

会いたい。

サスケ「おはな?？」

ギク!!

急いで涙をふく。

泣いてるとこ見られてくない。

おはな「何??」

あたしは笑う

サスケ「いや・・・なんでもない。」

おはな」「じゃあね
「..!」

家に急いで帰り、風呂、ご飯を終わったあと、布団で泣いた。

くっそー！！

女神のヤツ、いい話作りやがって!!

次の日……

卒業試験は今日だ。

ナルト「あれ??おはな目赤くない?。」

おはな「あはははは!..!き..気のせいじゃなくて!..!」

もう!..痛いとしりしりてくるなあ..

サスケに目を合わせ、
言わないでのサインを送る。

サスケはうなずいた

イルカ先生「今から卒業試験を行う、なお試験内容は陰分身の術だ
！！」

あたしはクリア！！

ナルトは落ちた。

ナルト・・・また落ちたか・・・

いつもわざと落ちてたけど、今回は大丈夫だからマジ目にした。

親のいるみんなはちやほやされてたけど、中には変な話している親もいる。

おはな「ナルト・・・」

ナルト「大丈夫ってばよ。じゃあな。」

で家帰りました。

あたしの出る幕じゃないし！……！

女神勝手すぎだろ！！（後書き）

次班分けっす！！

もつめちゃんくちやだな。おい！（前書き）

あはははは。

いま思っただけで、九尾って12年前に現れたのに

4年前ってのはやりすぎたかな???

まあ、いまさらなんなので、班分け行きます（ ^ o ^ ）

まづめちやくちだな。おい！

次の日

あたしは額あてをしてアカデミーへ行く。

額じゃなくて、カチューシャにしてるけど……

アカデミー

扉を開けると、なぜかナルトがいた。

パタン。

おはなは見なかった事にした。

おはな「よし、もう一度。」

・
・
・
・
・
・
・

ガラッ！！

おはな「……………見間違いかな……………ナルトがいる。」

サクラ「おはな、見間違いじゃないわよ。まあ……………驚くのも無理ないけど。」

おはな「ま……………いつか。おはようナルト！卒業おめでとう！」

ナルト「おはなごめん!!！」

いきなり土下座した。

ナルト「その腕……俺の「いいよ。そんなこと。」……え？
」

おはな「思っていないから気にスンナ。ほら！席に着かないとー！」

ミズキのやろーだな。

いの「サスケ君の隣はあたしよ!!」

サクラ「何いってんのよ!?!?!あたしだしい?!?!」

はい！！ケンカ

おはな「・・・めんどくさい事してんなあ・・・」

サスケ「シカマルみたいな事言うなよ。」

おはな「あんな奴と比べないで！！サスケ！！あんなサクラといの
の両側に座れば??？」

頭いいあたし！！

シカマル「だれがあんな奴だとお??？」

げ！！出た！！

おはな「てめえの事だよ！！このくそじじい！！」

シカマル「お前みたいなばあに言われたかねえよ！！」

おはな「やんのかよ??こらあ!!」
シカマル「こっちのセリフだあ!!」

ナルト「レベル低!!!!」

「お前に言われたくねえよ!!」

!!!

おはな「何はもってんだよ!?!」

シカマル「うっせーよ!?!」

あたしとシカマルは仲が悪い。

2人ともIQが同じだから。

勝負したけど今は100勝100敗という引き分け。

おはな「勝負するかあ??あ??」

シカマル「めんどくせえよ!」

おはな「逃げんのかよー!」

シカマル「なんだとお!?!」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

突然女子の悲鳴が聞こえた。

おはな「何!?!?!?!?!」

どうやら、サスケとナルトが唇接触事件が起きたらしい。

興味なし。

シカマル「やんのかよお??おい!!」

おはな「黙れ!!やるか!?!おお??」

イルカ先生「シカマル!おはな!そこまでだ!!」

おはな「ちッ!!」

シカマル「次はねえからな!!」

とりあえずどっかに座ると、サスケが隣にきた。

サスケ「まったく・・・最悪だぜ・・・つーかファーストキスはおはながよかった・・・」

おはな「ん??なんか言った?」

ナルト「・・・鈍いなあ。」

サクラ「同感。」

そして

ナルト あたし サスケ サクラ

の順に座っている。

いるか先生「まず、みんな今日から一人前の忍者だけど、三人一組が基本だ。」

チームは力が均等になるよう、先生が勝手に決めた。一組だけ、4人の班がある。」

で次々と班が呼ばれていく。

おはな（シカマル以外なら誰でもいいや。）

ナルト（サクラちゃんとおはながいたら最強だな！あとは・・・サスケ以外ならだれでもいいや）

サクラ（サスケ君と？）

サスケ（おはなと・・・あとは足でまといが増えるだけだな。）

いるか先生「次7班、うずまきナルト、春野サクラ、うちはサスケ、
椿山おはな。」

児童A「先生！！均等じゃないと思います。」

いるか先生「決まった事なので。次八班。」

んで休憩が終わったら、教室また来いと。

おにぎり食ってるサスケ発見！

おはな「おにぎり好きなの???いる?」

今日の昼飯がたまたまおにぎりだった。

サスケ「いいのか？」

おはな「うん。作りすぎたから、誰かにあげようと思ってたし。」

照れながら食ってた。
かわいい？

サスケ「うまい。」

おはな「良かった！」

ちなみにあたしはわかめ味が好き。

サスケ「良かったらまた作ってくれないか？」

おはな「いいよ！ねえサスケって甘い物嫌いって本当？」

サスケ「ああ。」

うそ…！

あたしなかったら生きていけないぐらい好き…！

サスケ「ところでそのリスどうしたんだ??」

あたしの肩にいるリスに気づいたらしい。

おはな「ああ。さっきけがしてたから、かわいいそうだし・・・」

サスケ「本当動物好きだな。」

おはな「うん！..!じゃまたあとで!」

サスケ「ああ。」

じげんくじく・・・

待ってたけど遅いから本を読み始めたあたし。

サクラ「ちょっと! !おはなそれ『恋心』じゃない! !」

おはな「うん。あたしがいま読んでんのは中。上中下そろえたの！
」

サクラ「あたしが持ってんのは『恋心〜あれから〜』なの！！」

おはな「嘘！！今度かして！！！」

サクラ「いいよ！！あたしもかして！！！」
おはな「いいよ！！！」

ナルトが黒板消しをドアにしかけた。

サクラ「ちょっと！やめなさいよ！」

サスケ「そんなトラップにひっかかる上忍がいるかよ。」

おはな「右に同じ。」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

ガラッ！！

大丈夫なの！？

上忍「……まああれだな、お前たちの第一印象は苦手だな。」

まじめちゅくちゅだな。おい！（後書き）

下忍試験!?? (前書き)

やっと課題テスト終わった - - !!!!!!!

下忍試験!???

場所を移動しての事

上忍「えーとりあえず、自己紹介な。名前と、好きなもん、嫌いなもん、夢」

おはな「そういうもん、先生からするもんじゃない。」

サクラ「そーよ、そーよ!!」

上忍「俺？俺はだな、はたけカカシ。好きなのは、まあいろいろ嫌いなもんはー

別にない。夢って言われてもなー!。」

サクラ「結局分かったの名前だけじゃない!」

おはな「自分で言ったくせに、まともな答えないじゃん!!!!」

ここから暇だから自分の番までリスと遊ぼ!!

カカシ「じゃあ次、右のお前から。」

ナルト「俺はうずまきナルト、好きなのはカップラーメン、もっと好きなのはイルカ先生と

おはなにおごってもらった、ラーメン！！嫌いなのは、ラーメンを待つ3分間！！

将来の夢は火影になって、里のみんなに俺を認めさせる事！！あとおはなに勝つ事！！」

カカシ「（アホだな。）はい次。」

サクラ「春野 サクラ （好きな物ツーカー人&夢はサスケの方を見て）

嫌いなのはナルト。」

ナルト「そーそーんなあ！！！！」

カカシ「（この年頃の女の子は忍術より恋か。）はい次！」

おはな「椿山 おはな 好きなものは動物と甘いもの！！嫌いなのは時間&約束を守らない人
あと動物&人をいじめめる人！夢は・・・シカマルに勝つ事と、生き別れの弟を探す事、
あと、お父さんを絶対殺す。 二こ真顔」

カカシ「（かなり秘めたチャクラを持っている・・・怒らすと怖い

タイプだな。
最後お前!!」

サスケ「名はうちはサスケ 好きなものは……1個ある。嫌いなものはいろいろ
夢なんて言葉で終わらすつもりはないが、ある人物を殺す事だ。」

カカシ「(さすがうちは一族の事はある。(じゃ明日演習な。」

サクラ「ちよっと！演習ならアカデミーでやったわよ!？」

カカシ「明日、第3練習所で下忍試験を行う。合格しなかった者は

アカデミーへ戻ってもらおう。」

おはな「やっぱ????」

ナルト「どこういう意味だつてばよ!??」

おはな「卒業つても人数をへらすプチ試験なもんよ。確か全体合格は9名だけだったような。」

あ!!!

原作言っちゃた!!!

カカシ「はい！正解！じゃ明日の朝5時集合な！朝飯は食つなよ。
吐くぞ。」

家

朝飯は食べる。

ちなみに横の部屋、紅さんっす！

まだ子供だからって言って結構お世話になってる。

次の日

5時

ナルト「眠い。」

サクラ「おはよう。」

おはな「おっはー！」

で本を読む。

あー！

おはな「リスちゃん！森におかえり。」

帰らない。

きんぎょさん

いつも鳥やウサギ、シカとか助けても森に戻り、森にいる時よって
くることは多い。

帰らないってのは初めて……

おはな「……まいつか！」

リスだし。

11時

本全部読み終わりました。

カカシ「諸君、おはよう。いやー実は目の前に猫が通りかかって・
」

三人ともにらむ。

おはな殺気崩壊中。

どんな猫がいたらこんな時間になるのかしらあ???

カカシ「よし！12時セット完了！いいか??お昼までに俺からこの鈴を奪え！
できなければ、あの丸太にくくりつけた上俺が目の前で昼飯食うから！」

サクラ「でも、なんで鈴3つなの?」

おはな「サバイバルよ！つまりあたしたちに仲間割れさせようとしてるのよ！」

カカシ「うーん、鋭いね！（恋は全然だけど）じゃよーい・・・はじめ！」

カカシ先生は本を取り出した。

イチヤイチャパラダイス……

おはな「ふざけんな！13歳を前に18禁っぽい本を読むな……！」

飛び蹴り

カカシ「ごめん。」

地味に避けた。

たのしそうじゃない？

下忍試験！??（後書き）

次へ続く

なんか合格もらった。(前書き)

はい！めんどいから1つ訂正にこでいいます！

13歳って言うてるけど12歳だから！！

ナルトと同じ年っす！！

もし、間違ってたらそう思っていてください！！

すみません(T_T)

でわどござ(^o^)

なんか合格もらった。

あーらまあ、こりゃ楽しい演習になりそつな事？

おはな」……マズめに行「うかな……」……

うーん……

真面目にせんと、アカデミーいっつのはキツイしなあ……

!!

じゃあ！本気モード！〜10の中で3を出そう！

ちなみに5を行くと、目つき変わります。

うしー！

おはな「雷盾！雷弾の術！」

m なんか勝手に作っている技があります。ご了承くださいm ((

カカシ「おお！こりゃ本読んでる場合じゃないなあ！（しかも、印が早い）」

しかし、もろにくらってたけどダメージあんまないっばい！！

うーむ・・・

地味に強い！！

作戦を考えるため、ここは引こう！

おはな「ドロン！っとな
「

さて逃げてきたのはいいが、どうするか・・・

サスケはナルト、サクラを足手まといに決めて、サクラはサスケの
事ばかり

考えて、ナルトはバカー直線に走っている。

まず、誰か1人でも探さなきゃ！

じゃないと、カカシ先生の思っ壺だわ！

「ぎゃああああ！…！」

「うわああああああああああ！…！」

•
•
•

はあああ・・・

絶対もうダメだあー！！

考えるより、ぱぱっとみんなを探して合流したらよかった！

行ってみたら、サスケがカカシ先生に押さえつけられて、ナルトは
なんか
丸太にくくりつけられ、サクラは見てる。

おはな「最悪の状況じゃん。」

サクラ「え？」

もう、お前らバカだ！！

カカシ「まったく、何もわかってないなあ。」

おはな「そうよ、サスケが人質になったら、サクラ、ナルトを殺せ
って言われてどんどん
命が奪われていくの。」

カカシ「そう、忍者の世界は厳しい。それにはつきり言ってもうお
前らダメ。」

チームワークばらばらすぎ。ナルトは一直線に走ってきてきてサクラは
サスケの事を
考えすぎ、サスケは押しでまといだと思い込んで、おはなは気づい
ても

実行しなきゃ意味ない。つまりお前はみんなの心配しすぎ。自分の
心配もしろ。」

「
「
「
「
.
.
.
.
.
「
「
「
「

カカシ「まあ、昼飯食ったら再開だ。午後からは鈴を隠してあるのを探せ！」

ナルトは一人昼飯食べようとしたから、お前はなし！あと全員食べ！」

ナルト「そんなぁー！！！」

でカカシ先生は消えた。

ナルト「別に腹なんか減ってないってばよ!」

ぐううう・・・

おはな「お腹は正直ね。」

あたしは弁当を差し出す。

ナルト「え?」

サクラ「ちょっと!」

おはな「大丈夫。あたしは朝ごはん食べてきたし！！お昼くたばってしまったら困るし！」

サスケ「今、アイツの気配はしない。食うならいまだ。」

んで食ってたら。

カカシ「ルール破ったなあ……………」

ナルト「ひいひい！……！」

カカシ「お前らどうなるか分かってんだろな？？」

おはな「あたしたち、チームメイトでしょ……！」

サクラ「そーよ……！4人で1つじゃない……！」

サスケ「その通りだ……！」

ナルト「そうだってばよ……！」

カカシ「はい！合格！！」

「「「え？？」」「」

カカシ「ご・う・か・く・」

サクラ「な・・・なんで？？」

カカシ「今までの奴等は俺のいう事をしたがってた。でもお前たち

は逆らったー！

よく分かんないけど・・・とりあえず、合格もらいました!!

なんか合格もらった。(後書き)

最後、投げ出しっす) ^o^ (

過去編（前書き）

いきなり書いてみました（＾Ｏ＾）

過去編

いま思えばサクラは今みたいな元気?? な子じゃなかった。

自己紹介されしばらくした後。

まず、1人でイタズラしていたナルト発見！

そのあと、いのかも友達になる。

公園

なんかムカつく子「サクラ！あんた最近調子乗ってんじゃない？？
ねえでこりんちゃん？」

したっぱ？「そーよ！」

したっぱ？「ママジジいー！ー！」

ナルトは「うー」の初めて見たらしくあたしに隠れた。

サクラ泣きかけてるじゃない!!

それに・・・

あたしもおろちまるや親父にあんな事されたし・・・

おはな「ちょっと!?!何してんのよ!?!」

みんな一斉にこっちを回く。

なんかムカつく子「何って見たらわかんでしょ!?!?」

おはな「だからってなんでいじめてんの?でこりんって・・・
あんななんか外見よくても性格くさってるわよ!?!?!」

なんかムカつく子「なんですって??!!あんたもサスケ君に気に入られてる
からって調子にのんなよ!」

おはな「乗った覚えなんかないけどね!」

いきなりクナイを投げてきたのであたしは素手で受け止めた。

おはな「やんのかよコラア!」

クナイを顔の横ぎりぎりまでに投げた。

「「「いやあああ……!……!……!……!……!」」」

と言って逃げた。

おはな「次したら飛び蹴りかますからな！！サクラ、大丈夫??？」

サクラ「う・・・うん。」

そいで、いのかいろいろ来た。

過去編（後書き）

短くてごめんねごめんねー！

調子に乗ってごめんねー！（>_<）

タズナさんを波の国まで連れて行くござ！(前書き)

はい！更新久しいなあ・・・

もう一個の方も更新しなきゃ・・・

タズナさんを波の国まで連れて行くっぜ！

んである日

突然ですが、朝起きたら枕もとに

家族の写真あった。

額縁つきで

おiiiiiiiiiiii!!

今頃サンタさんのつもりか!!??

季節はずれ!!

任務後

任務は逃げ出した猫をと捕まえるのだった。

依頼主見たけど、あれじゃ逃げ出したくなるよ。

おはな「また逃げ出すよ、あれ。」

ナルト「俺もそう思っつてばよ！」

カカシ「まあ、もういいじゃないか。」

火影のじいちゃん「で次の任務じゃが・・・」

ナルト「Dランクはいやってばよ!!簡単すぎであきたってばよお!!」

おはな「ただこねるな!飽きたのはあたしもなんだから!」

サスケ「おいおい・・・」

火影のじいちゃん」そこまで言うなら・・・クラシクの任務を受けさせよう。」

「.....」

ナルト「よっしやー……!」

サクラ「えええ?」

サスケ「……」

おはな「で、どんな任務なんですか?」

火影のじいちゃん「ある人を波の国まで護衛する事じゃ。」

ナルト「えー？」

カカシ「文句言つな!!」

その人が・・・

タズナというじじいだった。

•
•
•
•
•

うわー！ー！ー！

どういえばいいんだろ．．

なんか地味

タズナ「ガキが大丈夫なんかあ??超不安じゃ。」

カカシ「まあ、私もいますので。」

おはな「悪かったわね。超たよりなくて。」

タズナ「特に一番背の低いやつ！」

ナルト「ん??誰だつてばよ??」

サスケ150cmぐらい、あたしとサクラ148cm、ナルト145cm

ナルトの事ですな。

ナルト「俺か!??」

サクラ「見たらわかるでしょ。」

うん。

ちびでたよりねー。

なんだかんだで出発する事に！

リュックに一応写真入れた！

母性ってもん？？

意味ちげーよ！！

んで歩いてたらなぜか水たまり発見。

にせう！

おはなはナルトを水たまりの方へ突き飛ばした

ナルト「おわー!!」

ナルトは水たまりをふんだ？

水たまり「い！」

おはな「あーれ？？おかしいなあ！水たまりが声だすなんてー！。
」

クナイ投げよー！

と思ったら水たまりが変形した

人に変わった。

ナルト「なーに!!!?????」

サクラ「うげえ！」

サスケ「おはなお前！」

カカシ「うーん・・Sだねえ！」

おはな「ちッ!！」

変な奴「くっそー！やりやがったな！クソ女！」

おはな「そりゃ痛いだろうなあ。ナルトが踏んだところお前のタマタマのトコだもん。」

ナルト「え？？」

といいナルトに変な奴は引っ掻いた。

！

おはな「気を付けて！あの爪毒がある！！」

とかいい自分はその2人組をクナイで気絶さしたんだけど。

サスケもナルト助けてたし。

サスケ「よおケガはねえか？ビビり君。」

ナルト「なんだとお！？？」

カカシ「あまり動くな。毒が回る里に戻って毒抜くぞ！」

いや・・・

あたし一応医療忍術使えるけど・・・

綱手さんに教えてもらったしね。

でなんか臭いセリフ言った。

おはな「あのねえ・・・あたし医療忍術使えるんだけど。」

ナルト「え??？」

カカシ「確かに毒は抜けたけど、次は出血大量でやばいぞ。」

ナルト「えーーーーー!?!」

カカシ「手みせてみる。」

とかいいつつ真顔でカカシ先生見てた。

多分九尾の力でもう治りかけてると思う。

ナルト「先生俺って大丈夫なの??? さっきから真顔で見てるけど・
」

カカシ「まあ大丈夫だろ。」

包帯を巻いてたな。

つかあたい、右手の上ら編もう綱手さんに治してもらったよ。

タズナさんを波の国まで連れて行くうぜ！（後書き）

はい！いつもありがとうございます！

感想はやさしくお願いします（<―>）

ガラスの？なんで！

再不斬現る！！（前書き）

真面目なタイトル（笑）

でわどどどぞー！！

再不斬現る！！

今度はタズナさんにカカシ先生が本当の目的を聞いていた。

簡単に説明すると、波の国は大名までお金を持っていない貧しい国で
タズナさんはある人物に命を狙われているらしい。

225

その理由が橋をかけようとしているから。

ついでに。

自己中のな考え!!

・
・
・
・
・

で船に乗って降りて、また森を歩いていると・・・

抜け忍の、再不斬さいざんが出てきた。

カカシ先生は写輪眼を開けた。

まあ、先生がどうにかしてくれるのを期待して、
あたしはタズナさ
んを

みんなで守ろうー！

カカシ「おはな！コイツをやっつける！」

って、あんなさんもう水の中に……

おはな「捕まるの早えーよ!」

ナルト「いや、おはな結構ボーっとしてたっばよ!?!?!」

おはな「ナルト!サスケ!あたしは再不斬の相手おとりになるから、カカシ先生を助けなさい!」

サクラ「タズナさんはまかせて!!」

おはな「ええ、任せるわ!」

で相手をするわけだが・・・

おはな「忍法！霧払いの術！」

うん！勝手に作り習得しといてよかった！

再不斬「何？？？」

おはな「何回しようと同じ！！ってか霧を出させなくしたのよ！」

再不斬「つち！水盾水流弾！！」

おはな「雷盾雷流弾!!」

水と雷が混ざった!!

逃げる!

みんなほっといたままだった。

カカシ先生は一応救出したので、あとはサクラと一緒にタズナを守る！

再不斬はカカシ先生にやられようとしたけど・・・

グサ！！！！！！

「????」
「本当だ。死んじゃった。」

!!!

あの声・・・どっかで聞いたことが・・・

サクラ「どうしたの???.おはな???」

おはな「ううん、なんでもない。」

そんなまさか……

カカシ「お前は追いかか？？」

仮面の人「おはな？？……そうです。僕は追いかかです。」

でなんとらんたら話してどっか行った。

やっぱりあの仮面の子・・・

中々・・・

カカシ「元気よく行くぞ!」

つと
いった

瞬間カカシ先生は倒れたのだった。

修行は木登り??ってもうそんなのつくたできとるわい! (前書き)

あたしは大阪の人なんです!
だからどうしたって??

今日は台風で臨時休業なのだー! (^ o ^)
学生にとっちゃパラダイス!」

で今回の話はおはなの過去を書いたのです!

見たくない人はできるだけ飛ばしましょう。

修行は木登り？？？ってもしんなのよっくたでまよるわい！

まず、タズナさんの家に行く。

正直ボロボロ・・・

いやそうだったと思ったけど、どことなく懐かしいのは木の葉の里に落ちてくる前、住んでた家に似ている。

ナルト「うわ！すごいばーばー」

バシン！！！！！！！！！！

ナルト「いってえ〜〜！何すんだってばよ！」

おはな「これからお世話になるんだから、失礼な事言っつな！！」

サスケとサクラは何も言わなかった。

でかれこれ、3日ぐらい寝てました。

医療忍術でけがは治しといたけど、写輪眼によるチャクラの消費は
いくらあたしでもできないからねえ・・・

ま！カカシ先生が寝てる間考える時間もあつたけれど・・・

もし、あの仮面の子が追い人だとしたら・・・

あたしは・・・

白とあたしは、双子の女として生まれた（原作崩壊）

その家は少し貧乏だったけれど、とても楽しかった。

あの日までは……

ある日、いつものように白とあたしが雪だるまを作って遊んでると
白は解けた雪を、ふしぎな力で雪に戻し雪の結晶を作った。

ためしにあたしもすると、できた。

それをお母さんの見せに行くと、いきなりぶたれた。

意味が分からなかったが、泣きそつな白をなだめまた2人で遊んでた。

すると、次の朝

家に大蛇丸が来た。

そして、お父さんはあたしたちを殺そうとした。

大蛇丸はお母さんを殺し、お父さんは白を殺そうとしたが、あたしがかばおうとしたら、

大蛇丸「あなた・・・おはなちゃんだったわね。いいチャクラを持っているわ。

あなたはくノ一になりいずれ私が迎えに行く。そして私の器になりなさい。妹の命を背負いながら」

おはな「白！逃げなさい！」

白「姉さん……！」

それで、木の葉の里に落ちた。

もしあの時、あたしが白の手を握って一緒に里に来たら・・・

追い人なんかなくてよかったのに・・・

カカシ「おい！おはな修行すんぞ！」

おはな「はい！」

なんの修行？？

つて木登り!???

そんなのできるわい!

一応走りながらしたけど・・・

てっぺん行った。

カカシ「ありゃー！早い！」

飛び降りてあたしは言った。

おはな「先生・・・あたし水面歩行も9歳の時からできんですけど・・・」

カカシ「そりゃすまん！タズナさんの護衛な！」

・
・
・
・

はあ
・
・
・

もう一度白にあって、木の葉の里の連れ戻したい。

カカシ「あの・・・話聞いている??」

おはな「行ってきます。」

修行は木登り???.つてもつそんなの???.くたでまよるわい! (後書き)

はい!

一応木の葉の里に行こう!

つて考えてます!

再不斬を・・・

カトーをどうするかね・・・

プロフィール(前書き)

いまさら、これかよ!???
と

思った人!!!

正常です) ^o^ (

プロフィール

椿山 おはな

性別 女

年齢 ナルトと同じ

容姿 目の色、髪の色は赤のかった茶色で、髪の長さは肩につくぐらい。

前髪は7…3。(いま風の)

額あてはサクラと同じく、カチューシャっぽくしている。

性格 やさしく、少し天然、鈍い（恋の方は）

かしこく、運動力もバツゲン！

里でなぜ、ナルトと同じ3回もアカデミーの卒業試験が落ちたのは、ナルトの為思つての事と考えられている。

シカマルと仲がえらく悪い。

ナルトがご飯を食べているのはカップラーメンだけと知った時から家を訪ね、見た所部屋汚い、洗濯物やまずみ・・・

それを見て怒り、以来毎日家を訪ねご飯、掃除、洗濯すべて行っている。

里のみんなは、おはなはナルトと結婚するのか、シカマルと結婚するのか

賭けをしている者までいるらしい。

プロフィール（後書き）

恋の方は、あたすがちゃんと考えてます！！

それはまたそのうち、小説に書くので楽しみに？

SIDEくそまい(笑)(前書き)

はー…！

今回SIDEまじり(∨_∨)

じやうけん。

SIDEくそ多い(笑)

今日から、タズナさんの護衛だあ。

サクラもいる。

とらじゅものの……

結構ひま。

だって!!

タズナさんが橋建ててんの見てて、周りを見ても再不斬や仮面の子

(絶対白！)、ガトウいないし。

ってか、仮面の子が白だとしたら、いろんな意味でどっかってんの
?????

あの時、離ればなれになりそのまま街やへんなところろろろしてる
うちに、再不斬と
会って……

うーん……

じゃあ、ガトウを殺して再不斬と白を里に連れて帰る！！

いいんじゃない???

おはな「よし!!..これだぁ!!..!!」

サクラ「!!..??..ちよ.. ..どうしたの??..」

周りを見るともう夕方から解散っぽかった。

SIDE
サクラ

おはな「ありゃ・・・もう夕方?？」

サクラ「最近、おはなおかしいわよ……ぶじしたの……」

最近、おはなはおかしい。

そう思っているのは私だけじゃなく、カカシ先生やサスケ君それにナルトまで気づいている。

あの、仮面の子に会ってからおかしいの。知り合いなのかしら……？

SIDEアウト

タズナさんの家に帰る途中、サクラは鞆をひったくられそうになった。

あたしはリュックだったから大丈夫だったけど

家へ帰ると、サスケしか帰ってない。

昨日、タズナさんの孫の・・・名前知らないや。

なんかその子と、ナルトが言い合いしてた。

悲劇のなんとか、かんとかって・・・

サクラ「ナルトは?？」

サスケ「まだ、森。」

おはな」「そのうち、帰ってくるでしょ。」

SIDEナルト

「もしもし、こんなところで寝てたら風邪ひきますよ??」

ん・・・???

ナルト「誰だつてばよ??」

目を開けると、おはなに似てる人がいた。

それに、サクラちゃんよりかわいい。

それじゃ、今まで考えた事なかったけど、おはなもかわいいのかな？

「どづかしました？」

ナルト「姉ちゃんの顔とふいんき・・・俺のチームの子にそっくりだつてばよ!..」

「それはうれしいですね。」

うーん・・・

「この子おはなと違い、黒い目に黒い髪は腰ぐらいい？」

おはなは髪短くて、茶色っぽいしな・・・

S
I
D
E
J
U
T

サスケがナルトの様子を見に行ってた。

で帰ってきた。

ナルト「おはなー!!」

おはな「何?」

ナルト「さっきさ、おはなに似た黒い髪のいるの人に会ったってばよー!」

白！???

おはな」「どこでー!??」

ナルト「え??森で・・・だけでも帰った。」

ち!!

使えないなあ!!

ナルトはあのまま寝てしまった。

橋

しばらくすると、深い霧が出た。

SIDEくそ多い(笑)(後書き)

次回、どうなる事やら・・・

血継限界（前書き）

戦闘ってかマジな話っす。

嫌いな人は回れ右！！！！

嫌いだけど、見てやるよ。

またひまだから見る方、そのまま下へ！！

血継限界

霧が出てきたので、カカシ先生があたしの顔を見てうなずく。

「忍法霧払いの術！」

辺り一面深い霧がすべて晴れた。

もちろん、再不斬と仮面の子がいる。

再不斬は顔をしかめながら言う

「うち！やはりいるな・・・」

「これで、霧は無意味ですね？？再不斬」

これ言ったのあたし。

うははは！！

見てあの顔！！

凶星だよ！！

「サクラ、サスケ！タズナさんを守れ！おはなお前はあの仮面の子をやれ

俺は再不斬をやる。」

・
・
・
・

「カカシ先生、戦うのは待ってください。仮面の子と話がしたいんです。」

まだ間に合う。

「同じですね。僕もあなたとお話しがしたいんです。再不斬さん僕からもお願いします
少し待ってください。」

そついい仮面の子はあの印をした。

「あなたもわかりますよね??」

「もちろんよ。」

犬、猿、牛の印を結び

「「氷遁 氷竜!!」」

「な!!」

再不斬は驚いている

術を発動したのはあたしの方が早かった。

そして仮面が割れた。

「お前は・・・あの時の姉ちゃん!」

気が付くと、ナルトがいた。

「白……久しぶりね、やっぱりあなただったのね。」

「姉さん……もう終わりにしましょう。お互いつらいです。姉さんは変わってませんね。」

あの時と変わってない。急所が10cmはずれています。」

そっぴい白は泣き、あたしのとこにきて抱き着いた。

「白……あなたも変わってない……泣き虫のままね。」

しばらくこの状況でいた。

ナルトが何か言おうとしたけど、カカシ先生が

「今は黙ってる。」

と
い
っ
た

数分し白は泣きやみ言った

「再不斬さん……僕は……」分かつている「……え??」

「あれがお前の言っていた、助けしてくれた双子の姉さんだろ。あの術を見て確信した。お前と同じ血継限界の生き残りだろ」

「な!!」

「血継限界??」

「……」

「双子お!!??」

上から順に、カカシ先生、サクラ、サスケ、ナルト

ナルト……

ついでにトコ違つたろ。

「姉さん……父さんは大蛇丸に殺されました。」

やっぱりね。

カカシ先生は言った

「おはな、お前過去に何があった？言える範囲でいい。言ってくれ」

あたしは話した。

親に殺されそうになったこと。

白をかばって、大蛇丸に木の葉の里へ飛ばされたこと。

いつか、大蛇丸があたしを迎えに来て器にされる事

「・・・と言うわけです。先生あたしはガトウ殺して、白と再不斬とともに

木の葉の里へ帰ります。無理だというならあたしをいますぐ殺してください。」

ナルトはびっくりしてる。

「カカシ先生！いいじゃないか！！3年も別れてたんだってばよ???

俺はおはなの意見に賛成だつてばよ！！」

続いてサスケ

「俺も賛成だ。あいつはあんまわがまま言わねーだろ。(ここで殺されちゃ困るしな)」

サクラ・・・ってかもうカカシ先生・・・空気読んでね??

「あたしも!!」「あー分かった分かった!!俺は別に構わないけど、判断を下すのは火影様だ。それだけは忘れるな。」

といい、ガトウのお出まじだっただけどムカついたのでクナイで心臓狙って
人生おしまい?

まあ、波の人間が避けれるようなスピードだったし

(写輪眼でも見えなかった・・・おはなお前は立派なくのーになる)

で、タズナさんの家に帰ったらガトウがいなくなって橋も完成したので

明日帰ることになった。

いなりとナルトの話も見れて満足!!

(写輪眼も開眼できたってか白?だったけど、おはなに似てるなあ・
・まあでも俺は
おはな派だな。)

「サスケ君、姉さんが欲しかったらまず僕に勝つことだね」

「!!!/ /」

（姉さんがいい人なのは知っています。けど・・・ナルト君はどう思っているのかな???)
姉さんの事・・・僕は姉さんと違って胸は平らだし・・・)

「白???」

「なんでもありません。」

（・・・ナルト君、姉さんによく抱き着くなあ・・・今だって・・・
じゅっ・・・）

「ナルト君は姉さんのことばり思っているんですか??..?」

は!..!

つい口が!..!!

「うーん・・・お前と同じ姉ちゃんって感じだな・・・」

ほ!..!..!

「なんでそんなこと聞くんだったよ??」

「いえ!別に」

(このウストラトンカチが・・・)

(バカ!!)

(コイツおはな同様自分のことになると鈍感だなあ)

(ナルトと白か・・・いいんじゃない??)

(コイツやっぱ超ばかじゃ!!!)

みんながこつこつ思つのは無理もないだろつ。

「白？あとでナルトの好きな物教えたい。」

「姉さん！！」

血継限界（後書き）

次回里へ帰ります!!

再不斬と白の今後を書いて中忍試験へGOです!!

帰ってきたぞー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

次の日

あたしたちはガトウも倒し、橋も完成したので木の葉に帰ることになった。

白や再不斬も一緒にね!!!

「今までありがとう。おかげで橋も完成したこれからは超安心じゃ

「!!」

んでカカシ先生とタズナさんがなんか話していて、ナルトといなりが別れをおしんでいた。

橋の名前がナルト大橋

実際見てこれは実に笑えた（ ^ o ^ ）

रुस

帰ってきましたよー！

白と再不斬は、木の葉に住む事になった。

再不斬は暗部へ

白は働く

あたしと白は一緒に住めるようになり、喜んだ

そして、木の葉から帰ってしばらくしたある日

あたしと白は晩御飯を買いに行こうと思ったとき、
曲り角でもめあ
いをしていた。

ナルトにサスケにサクラと木の葉丸たち
それに……

我愛羅とてまり、カンクロウ……

早いなあ……

もう中忍試験かあ

「あんたら何してんのお??」

知ってるけど聞いた(笑)

「おはな!こいつら木の葉丸を・・・!!」

「それに、なんでか砂隠れの忍者が・・・」

「サクラ、なんで砂隠れの忍者がいるのかは中忍試験の忍者だから
」

「正解じゃん。」

「おい、その女名前は？」

「あたし??あたしは椿山 おはな あなたは??」

「てまりだ。お前・・・強いチャクラがブンブンしてる」

「それはどうも、でその黒い奴、その子離しておげなさい。今のうちにしといた方が
見の為だけど？」

殺気をカカシ先生以上に出しました。

あははは!!!

味方のナルトやサスケ、それに白でさえおびえている（笑）

「で・・・話聞いてる??？」

にっこり笑顔と殺気の「ラボ

「わ・・・わかったじゃん」

「おい。」

「はい?？」

お次は我愛羅かよ

「俺は砂の我愛羅だ。お前も中忍試験に来る楽しみにしている。」

「はいよ〜〜^m^まあ、あんまあたしの仲間に手を出さない方がいいよ。」

早死にしたくなかったらね（笑）」

（目はマジだつてばよ・・・）

でまたある日

「ああん!!!!もう!!!!カカシ先生ったら急に集まれとか言っというて

まだ、
来てないじゃない!」

それには理由があるんだけど・・・

言わないでおっじ。

「遅いってばよ!」

「あれから1時間たってる・・・」

「こんなクソ暑い日に・・・殺したるか・・・」

「おおおおおはな……おやえして（ばよ……）」

「やあ！諸君 Good afternoon……今日はおはあさんが
・その前になんか言つては？」
「じめんね〜」

で

おはなは中忍試験に受けれるようになった!!

カブトつぜえ（前書き）

ちやーす！..

ぢぢあいきまっせ..

カントゼえ

はい！！みなさん！！

GOOD MORNING！！

いせー畳いわあ・・・

で今日は

中忍試験の日でござえます!!

久々の忍者アカデミー！！

確か試験会場は原作通り301！

つーことはもち原作通り・・・

「おい！！お前たちみたいなのが中忍になれるわけねー！！」

・
・
・

201で試験官が幻術つかってじゃま??してるわ・・・

「なんなんだってばよお!?!」

「ちょっと!そこどいてください。」

「つち・・・」

ああ！！

きみたち！

騙されてるよお！？？

で

おかつぱでゲジ眉の・・・ロック・リー

そしてだんごのテンテン

でネジ

みんな、気づいてないようだから言っちゃおう

「ナルト、サクラ、サスケ上行くわよ。」

「「「えっ?」「」」

「上って・・・なんで?」

「「「2階、試験会場は3階。そしてそのの邪魔してる人は試験官。ってこと」

「 「 「 「 「 ! ! ! ! ! 「 「 「 「 「

みんな、嘘!?? みたいな目で見てる

じゃいきなりリーがサクラに告白してフラれ、終わり。

サスケはリーと勝負するらしい。

で

勝負！！

ですけど・・・

サスケはボロでリーがあゝの禁術を使おうと思つてたところにガイ先生
登場！！

つてか禁術あたしけつこつな数もつてるよ？

「うわ！！先生もおつかばで眉毛ふと！！！！」

「はは！！！！その茶色の髪の子！！ハッキリ言つね！！（キラ
ン！！）」

「おえ！！！！」

なんだかんだ言って結局301へ!!

大蛇丸とカブトってのはやっぱりかいだけどお・・・

「おはな？？どうしたってばよ？」

「別に・・・」

うーん・・・

大蛇丸やカブト相手になればメラゾーマとか、マヒャドとかバキム
ーチヨとかの方がいいよね！

全部禁術ですけど！！

b y 綱手

そうなんです！

9歳の時、勝手に里出て行って綱手ちゃんに医療忍術とか教えてもらったり

技見てもらったりしていたのだ！！

「ちょっと！おはな？？ドア開けるわよ？？」

「ああ！！OKOK！！開けちゃって！」

で開けますと・・・

シカマルやその他いろいろ久しい顔たくさん！

いのとサクラはサスケの取り合いでケンカ！

あとは無視

「おい！おはなテーマ無視してんじゃねーよ」リアア

「黙れ」

「なんだと?？」

無視

「ちょっと!君たち静かにしといた方がいいぞ。」

「さーせん。じゃ静かにしとくんぞ(おやまあ、カブトさん何のよ
うぞ?)」

「それがいいよ。(やっぱばれたか・・・久しいね)」

「何のようだって聞いてんだよ??」

みんなびっくりあら仰天!!

「ふふ・・・そんな冷たくしないでいいじゃないか?大蛇丸様が君を迎えに来たのさ。」

「そうかい、でもあたしはそんな気ないけど・・・なんだったらここで始末すんのもありだけど・・・」

「まあ、それは試験中でいいじゃないか。じゃ楽しみにしてるよ」

「うちー！さっさとくたばっちまえー！」

「おはな・・・まさかあの話の・・・」

「べつやらそうみたいね・・・予想より早かったわ。」

「..?」

「試験でぶっ殺すー！」

「っておい、何の話してんだ?？」

何も知らないキバが言う

「思いつきりガンつけてたじゃない!」

いのさん・・・あんたも結構するよ?

「おい！静かにしやがれ！」

ぞわぞわ

「またせたな・・・中忍選抜試験第一試験官の森乃イビキだ。」

カブトつぜえ（後書き）

次回へ続くのじゃあ！！

ペーパーテストとかくそだりい（前書き）

ごそごそ

あ！！

失礼！

何してたかって???

へへーん

実は、この中忍試験終わってしばらくしたとき原作を無視して

主人公があることをしよう！！

というネタを考えてるトコなんです！！

そのうちするんで楽しみにしてください。

)(> 0 >)

ペーパーテストとかくそだりい

派手に出てきてジャンジャッジャーン！！

と試験官イビキが出てきたあ！！

「えーまず、前から順にこのくじを引け。」

みんな引いていく

うーんと何々・・・

19番・・・

えらく前だなあ・・・

「その番号の席につけ！」

で着きました。
と

横は、てまりとシカマル

「ふん、お前か」

「いやあどつとも、てまりちゃん！」

「テマリでいい。ってかさっき何をもめていたんだ？」

「ああ・・・ちょっと昔世話になった奴でね・・・」

「ってかシカマル横ならカンニングしたるか」

「おい、お前今俺のテストカンニングするとか言ったな」

「あは？ばれたあ？」

「静かにしやがれ！今からルールを説明する。まず・・・」

ごめんちゃい。

めんどいから説明飛ばす（*^^）v

知ってるでしょ???

知らんヤツは今から本を買いに行け！！
420円ぐらいケチるな！！

それかナルト アニメ検索

って押したら出てくる！！

アニメだったらタダだよ！！

はぁはぁ・・・

ごめんなさい

いいすぎました。

b
y
作者

説明終了

「じゃ今からテスト用紙を配る！・・・よし！後ろまでいったな。でははじめ！……！」

まずう、問題を見る

超

じじじじ

あはは
・
・
・
・

・
・
・
・

簡単！！

b y 女神の力です

何じゃこね！

すらすら解ける！

まあこつ見えてあたしは、アカデミーでも

座学
5

忍術
5

授業態度
5

体術
5

というオール5だあ!!

ニヤ!!

おでりゃああああああああああああああああああああああ!

解いてやるぜえ (^ ^) /

数分後

棄権の可能性を間抜け、なんとか一次試験合格じゃい!!

セー——————フ!!

「ナルト!よくやった!!」

「おはな!見直しただろ?」

「はいはい!」

SIDEイジキ

つづまき なると・・・

まさか白紙で合格する奴がいたなんてな・・・

おもしろい。

お次は・・・

椿山 おはな

わずか10分でこの問題を解くとは・・・

まだみんなが一次試験の意味を分かってない時、1人だけ鉛筆が進んでいた。

しかも、全部あっている・・・

S
I
D
E
J
U
T

次の日・・・

「私が二次試験官のみたらし アンコよ！今回の試験は第43練習
場・・・」

別名 死の森でやってもらおうわ！」

「わー！おもしろそうー！」

といたたのはあたしだけだつた・・・

「あ、その女子・・・その細い子・・・」

だけど・・・

ここで大蛇丸が来るのよね・・・

って見つけた!!

ナルトにクナイを投げつけた!!

ぽっ……

「何してんの??変態ちゃん。」

「ふふ・・・ばれちゃった?」

きもお!!

(正体はまだ明かさないでね?いろいろと面倒だから)

「はいはい。つてか失せろ。」

「じめんなさいね。」

「なんだったばよ……」

「えっと気を取り直して、名前を呼ばれた者あの小屋に来なさい。」

「ここも原作通り、天と地の巻物を二つ持って5日以内に塔?にくる
こと。」

ちなみにあたしたちは、天。

巻物はあたしが持つことになった。

「言われた場所に行って!そして試験は一斉に始める!!--あと二つ

アドバイス……
死なないでね。」

みんなの顔から血が引いていつてる。

そんなビビんなくても……

(ふふ・・・おはなったらずいぶん強くなったわね？あとは木の葉崩しを行って私の器にさせ
私色に染めてあげる？)

いま寒気が・・・

え・・・何？？

ソワ！

ペーパーテストとかくそだりい（後書き）

次回・・・戦闘が・・・／（。□／）／□。／

二次試験スタート・・・ある意味別の試験かも（笑）（前書き）

うははは！！

今回は、創立記念日で学校が休みなのだあ？

二次試験スタート・・・ある意味別の試験かも（笑）

「スタート！」

アンコさんの声でいっせいに扉が開きスタートした。
おそらく、大蛇丸はサスケとあたしを狙ってくる。

なら、まずサスケを守らなきゃ！

と、言ったものの・・・

「おはな、まずどっしりする。」

サスケさん・・・

あたすに聞かないでくださいよ・・・

「そうね・・・とりあえず寝たりする場所を探しましょ。」

「えー！！？なんでだつてばよ？？」

「いきなり巻物を奪つのは早いわ。なにがあるか分かんないからみんな離れたらだめ。」

「1人で行動は絶対しちゃダメ！！特にナルト！！分かった？？」

「なんで俺だけ・・・」

「「あんたがまっすぐぶつかって面倒な事になりたくねーからだよ！！」（しゃーんなるー！！）」

「サクラとかぶった。」

「ま……まあ、とにかく絶対しないでよ!!!!でどんな所にするの？」

「うーん……洞窟っぽいところがいいわね……」

「でも周りが見えくないか？」

「サスケ、その事なら大丈夫!!敵に見えない程度に穴をあけるわ。」

「了解だつてばよ!!」

で探す

「なかなかないわね・・・」

「まあ、しょうがないわよ。サクラ焦る事はないわ。」

ガキーン！

その瞬間前方からスゴイスピードでクナイを投げてきた奴がいた。

残念ながらあたしが、クナイで跳ね返したけど？

「大蛇丸・・・なんのマネだ？」

「あらまあ・・・避けられちゃった・・・今の本気で投げたのにな
え・・・」

「つち！
もう来たか。」

「あなたの目的は何？あたしを連れ戻すだけじゃないでしょ！それ
だけなら人の顔取らずに
いきなり来るはず」

「以外に鋭いわね・・・正解？それだけじゃないわ。」

「言つ氣がないなら強制的に吐いてもらつわ。」

そついいあたしは、クナイを左手で用意した。

「ふふ……どうかしら……」

同じく向こうも構える。

「土遁！土石竜」

印は片手の指だけ動かして見えなかったようにした。

「ぐはあ!!」

大蛇丸……

どうやら影分身ではなくもろにくらったわね……

「今の印……見えなかったってばよ……」

「それなのに、術が発動した・・・いったいどんな修行をしたの！
」？」

「まさか・・・私を超えてるなんてねえ・・・急所狙ってたし危な
かったわ。」

「うち！さっさとくたばりやがれ！..！」

その頃のアン」

「さーてと・・・」

ふふ・・・

さつき、悲鳴が聞こえたわ

聞いたことあるような声だったけど・・・気のせいよね

もう始まったわね

これから、どうしましょ・・・

あんまゆっくりできないわね・・・

5時間ぐらいしたら、早い組はもう到着しちゃっつー!!

団子でも食べようかしら

「アンコ様、大変です!!」

「何?どうかしたの??」

「死体が見つかりました。」

「その場所へ案内して!!」

んもう!

死ぬなってアドバイスしたはずよ？

いろいろ、めんどいことになっちゃっじゃない・・・

さよなら、5時間・・・

「1111だね。」

！！

これは・・・

顔がない死体？
まさか！！

「身のものを確認したところ草隠れの忍びと思われます。」

この顔・・・

さっき、茶色の髪の子に向かってクナイを投げた奴の顔？？

奴が来たの！？

「えらいことになったわ！あんなたちすぐ火影様に知らせて！説明してる暇はないの！！」

「は！！」

つくそ・・・

早く探さなきゃ！！

数分後のおはなたち

SIDE
サクラ

なにこれ・・・

あの大蛇丸って奴結構強いのに、おはなはまだ一つも傷を受けず戦ってる・・・

それに大蛇丸・・・もうチャクラがほとんどない！！

攻撃してもすべてかわされたり、ガードしたりしてる・・・

おはなは、あんだけの術を発動したりすばやい動きをしてるのに息

のーつも乱れてない！

正直動きについていくのたせいっぴいー！

見えなくなる時も何回あったらろう。

おはなってこんなに強かったの??

しかも、目つきが怖い

殺気も今はもうないけど、会った時死にそうなくらい出してた。

SIDEアウト

「やばいわね……ここまでとれちゃあ……じゃあね」

そっ払い消えた

「っち！逃げやがってー!!」

二次試験スタート・・・ある意味別の試験かも(笑)(後書き)

戦闘シーンあんまり書いて無くてごめんなさい！

キャラかわっちゃった(笑)

あんの！クソ変態が！！！！

逃げやがって！

絶対次あったら、ぶっ殺す！！！！

「おはなスゲーっつてばよ!!」

「ありがとう」

あんにゃろー・・・
言いたい事いいたい放題しゃがって・・・

で周り見る

森半壊

気づいたらアンコさんや上忍がいる

ナルト地味にびびってる

サクラ震えてる

サスケびっくらポン！

みたいな感じい

「……ちょっとやりすぎちゃったかな？」

「「「ちょっとじゃねーだろが！」「」「」

あっは！

みんなにつっこまれた

この森・・・もろくね？

ためしに地面蹴る

バコーン！！

地割れの完成

「何してんだYO？」

あれ？

カカシさん？

「よ」の発音違うよーな・・・

「おはな・・・あんだどんなバカぢからよ・・・」

いのさん？

あんたに言われたくない

ほとんどの上忍はこう思った

「（あの力・・・綱手様に似ている）」

「あの・・・地面の強度図ろう思ったらこうなりまして・・・」

「図るのにここまでする事ないでしょ？」

あはは・・・

カカシさん・・・

顔笑ってるけど殺気だしてんじゃない・・・

「だってさあ！大蛇丸ここで殺そうとさあ思ったらアイツ逃げやが
つてさあ！！」

幼稚な言い訳

このあと

おはなが上忍、火影に呼び出されるのは無理もなかった。

キャラかわっちゃった(笑)(後書き)

次回、中忍試験のとき原作ぶち壊しです(笑)

けっこん呼び出して怖いww(前書き)

お久です！

ふふ・・・

ネタができたのだあ！

いきなり疾風伝にいつちやうからねえ！！

中忍試験終わったら覚悟しなあ(笑)

けっけい呼び出して怖いww

という事で試験は二次試験合格したが・・・

予選する前に呼び出されたおはなである

火影様の部屋だす

「おはな？お前はどついう事だ？なぜ大蛇丸を知っている？」

「・・・木の葉の里に来る前にちよつといろいろありまして・・・」

「とつうか、お前は来るじゃなくて落ちてきただな。」

上から火影ちゃん、おはな、カカシ先生

ちなみにこの会談？にはカカシ、ガイ、アスマ、紅、アンコ、ハヤテ、イビキ、火影ちゃんがいる
ちなみにナルト、サスケ、サクラも

黙ってるけど

もうほとんど、取り調べやないか!!

作者は大阪人です

ああー怖い怖い

誰がしゃべってんのか分かりずらいと思うので
名前今だけ入れますね！

紅「それにあなた、土遁、水遁、雷遁を使ってたわね。」

ハヤテ「ごほ・・・もう上忍レベルじゃないですか・・・ゲツホ！」

アスマ「確かおはなは継血限界で氷遁も使えるな。」

火影「資料にはお前は水の性質だと書いてある。」

なんか・・・やばい状況??

アンコ」その他の性質を使えるだなんて・・・あなた一体何者？」

めんどくさー・・・

やるんじゃないかった・・・

女神いなんとかしてよ・・・

「えー？やだ」

くそ・・・使えないわい

「もう！しょうがないわねえ・・・」

幻覚

見せてる

で

転生の事以外の過去

「わんぱくちゃん！」

けっけい呼び出して怖いwww(後書き)

次回へ(* ^ ^) v

いれどどーやー!! (前書き)

毎回短くてすみません (<|>)

ってか登録の人多くなったなあ泣

「わびやーやー！」

ちなみに女神によって出されたおはなの過去の幻覚はナルト、サク
ラ、サスケも見ていた

火影「おはなの大蛇丸のことについては分かった。だがなぜ雷遁な
ども使える？」

カカシ「あの術の完成度から見るとお前は風遁も土遁・・・すべて
使えるはずだ。」

ギクギク!!

おいおい・・・

かなりやばくね??

この状況・・・

アスマ「一体どんな修行をしてきた？」

「・・・えっと・・・実をいうとアカデミーの授業は影分身にさせて本体のあたしは
綱手様や自来也さんに修行させていただいてましてね・・・」

頼むからもうこれ以上の追及はやめてケロー！

カカシ「本当だな？」

本当！これ本当だもん！！

「はい！！そうです。」

腕も治してもらったし！
綱手ちゃんに！

ポン！！

つて

自来也登場!!

・
・
・

あんた神！
今日から自来也あたしの神じゃああああああああああ
あ！

(うは・・・おはなむっちゃ田まらまらしてゐるっばあ・・・)

(ピンチだったのね・・・)

(みえみえだっの！まあそこがかわいいんだけど・・・/ /)

(・・・なんか理由がありそうだけどまあ、そのうちまた聞き出す
事にしよう・・・)

b y カカシ班

みんなは顔を見合わせうなずいた

火影「なら今日はここで解散じゃ！自来也は残れ」

パ
タ
ン

火影
の部屋

解散といったものの上忍、自来也、火影はまだ部屋にいた

自来也「ったくおはなはよお・・・嘘ならもつとばれないようにしろっての」

カカシ「明らかに助けてって目でしたね・・・」

自来也「正直にいう。確かにわしが修行をつけたが風遁しか教えておらん！」

カカシ「やっぱりそうですか・・・」

火影「おはなはまだ何か隠しておる。しかし・・・なぜクシナに似ておる？知恵はミナト・・・」
笑った顔もミナトに似ておる」

ガイ「私も中忍試験で見ただけですが、気づきました。チャクラの感じも似ています。」

カカシ「俺もそれは気づきました。」

紅「でも、おはなは白と姉妹だし・・・もともと水の国付近で生まれたと・・・」

アスマ「何か隠していますね。」

アレン「ここから行動もよく見ておかないと・・・」

女神

「ふふ・・・おはなちゃん・・・嘘ついちゃってごめんねえ・・・
いや・・・セツナなんだけど・・・本名は。
いろいろ楽しみはあとにとった方がいいでしょ??
そのうち話すけどねえ」

「だじやーやー…」（後書き）

おはな・・・いやセツナの本当の過去とは・・・???

おはなの秘密（前書き）

今回は女神視線で書きます

おはなの秘密

ふふ・・・

実はおはなちゃんをかわいくて、かわいそうだから転生させたという事でわない

女神だってちゃんと理由ぐらい持つてるんだけど、それをおはなちゃんに言っていないだけ

ミナト、クシナという人物から依頼があったのよ？

1人波風ナルトに双子の姉波風セツナがいてその人物が命死にかけたのだ。

だからそちらの世界で誰か命が欲しいと・・・

こんなの間違ってるに決まってるけれど・・・

だからこっちの世界で満足に生きていけなかった人物を器にそれがおはなちゃん！

2人は大喜び！！

その人物に感謝し寿命をセツナちゃんにもらった。

でも九尾事件が12年前おこった。

おおざっぱに説明するとミナト、クシナの2人が命をかけてナルトに九尾を封印した

そして死後わたし女神の元に現れ、木の葉に九尾の関係の者が2人いると
なれば危ない

だから私の力で白を双子の姉妹として物語を作った

白をあやつって

大蛇丸たちが来たのは予想外だった。

そして名前もばれないようかえた
ナルトもうずまきになり一応まぬがれた。

でもなぜか九尾事件がもう一度おこった。

暁のトビが操ったと考えるとよいだろう

そして今

クシナ、ミナトが私のところに来た

「何度もすいません。ただ3代目やカカシ・・・里のみんなに会い、セツナ、ナルトの事をみんなに伝えたいんです」

「どうかお願いしますってばね!」

「いいこと思いついちゃった」

「「なんですか?」ってばね」「」

「それは・・・というわけできっかけは私が作るがタイミングを誤ったらだめよ!」
セツナことおはなは私がいろいろ少しずつ吹き込んでいくから」

「そこまでさせていただけるんですか?」

「ええ。いくら神の私でも人の命を復活させる事はできないけど・・・
これならいいでしょ。」

「十分つてばね！ああ早く会いたい！」

「それじゃ、そのときまでじじじいといわね。」

おはなの秘密（後書き）

以上です！

秘密などはもう少しで書くんでお楽しみに？

「...おののてんじせにせにせに何にナルと...」

「せにせに」

帰るとき顔岩を見た

登場

「おはなつてば思いつきり困つてるとこ見れたつてばよ！」

ガシ！

抱き着く

「それが狙いなの？」

「ふふーん！」

げし！

「いって！サスケ何するつてばよ！？」

「ふん！」

「あらまあ。」

でなんとなく四代目の顔岩見る

すう

「クシナよく頑張った。ありがとう」

「ふふ・・・そっいえば名前は？」

「2人とも自来也さんから弟がナルト、姉がセツナ」

「いい名前ね・・・波風ナルトに波風セツナ」

すう

何？

今の・・・

四代目顔岩そっくりの人ときれいな女の人・・・

「おはな? どうしたってばよ?」

それにナルトって

もしかしてナルトのおや?

セツナって・・・誰??

なんであたしだけに見えて・・・

女神
SIDE

ナルトと双子だとばれないよう変化の術をかけた。ただふいんきと、表情などはかえらないでおいた。

それに白と似せておいた

しかも今は白だけ事情を入れておいた。

あとは白が動いてくれるだけ？

SIDEアウト

「おはなごうしたの??」
「」

セツナって誰なの？

「おい！どこ行くんだ？！！」

ボタン！

「な・・・なんじゃ・・・おはな」

まだみんないる？

「火影様！セツナって誰なの？」

「おぬしでござんを……」

「姉さん……まさか記憶が？」

「白！……どづい事なの？……なんか知ってる？」

「白！記憶とはなんだ？」

「何があったってばよ？」

「ええ？どづい事？」

「紅？どこへいった？つてキバ？」

「・・・ずっと黙ってたけどナルトとおはなのにおい・・・なんか似ているんだ・・・」

「「「ええ？？」」」

つて気づいたらもうガイ班、アスマ班、紅班、カカシ班のメンバー全員いた。

ついでにシカクさんやもうその辺の人まで

「白知っていることとすべてはなせ!」

カカシ先生まで・・・

意味が分からない

女神・・・どういづつもりなの!?

ポン!!

「おれさま、おれさま」

「……」

「……そんなまさか……なぜミナトとクシナが……」

家族（前書き）

えー・・・

なんかすごい重いタイトルだけど内容・・・普通かな???

家族

「ミナトにクシナ！??なぜおぬしらが・・・それになぜ白を知っておる??」

「すみません・・・もうばれちゃいました・・・」

「白!?!?どうしたの??あったことあるの?」

あたしあったことないけど・・・
けど・・・

何か懐かしい感じが・・・

サクラ「ねえ・・・あの金髪のお兄さん教科書に載ってなかった?」

いの「確かに……」

キバ「におい……おはな、ナルト、金髪の兄ちゃん、赤の姉ちゃん全員においが同じだ……」

赤丸「ワン!!」

はい？

んなアホな

「まーさか!!キバあんたニンニク食べた??」

「食ってねえわ!!」

「ワン!!」

「あんたさっきからワン!しか言ってないじゃない!!」

「せ・・・先生??」

「カカシ・・・久しぶりだな」

「なーると!!せーつなあ!会いたかったってばねえ!!!!」

「おゆ!!」

「ぐえ!!」

「ぎやあ!!」

だれえ?この人??

ってか力強すぎ・・・

「ぎ・・・ギブギブ!!」「

「同じく・・・だってばよ・・・」

「あー!ごめんってばね!」

ば!

と離してくれた

ああー死ぬかと思った

三途の河見えちゃったじゃん・・・

「んーと・・・セツナの事は僕が話すよ!..!」

といいあたしの方に視線を送る

「???あの・・・あたしおはなですけど・・・」

「細かいことはきにしないってばね!..!」

「いやいや気にしますか?..?」

「解!!」

金髪の人はそっぴい印を組んだ

「ん？」

なんか・・・あたしの周り・・・白い煙いっばいなんだけど・・・

ポン!!

「きゃああああああああああああああああああ！………」

目の前が白い煙でいっぱいなんだけど……

煙が晴れた

「おゲツホ！！ゲツホ！！って何するんですか？？」

周りを見るとサスケは顔赤くなってるし、サクラはえ？と言ってる

カカシ先生はマジ？？みたいな顔だし……

ナルトはあたしの顔をガンミしている

なんじゃ???

こりゃ・・・

「君はおはなじゃなくセツナという名前。ナルト、セツナ君たちは双子の姉弟として生まれた僕たちの子供だ。」

「はいあああああああ!????」

「なあにiiiiiiiiiiiiiiii!??」

名前は・・・椿山おはなじゃなくて・・・うずまきセツナ・・・

٤٧٦

家族（後書き）

次回へ続く

真実（前書き）

にやわー!!

今回の話意味わかんない・・・かも（<|>）

真実

「あれ？でもあたしが2人の子供だとしたらなんで姿変わったの？」

まあ、隠してた理由は分かるけど・・・

「まあ・・・名前だけ違っていて姿がクシナそっくりになったらさすがに上も黙ってないだろう？」

「なるほど・・・怪しまれないためですね。」

カカシナイス！！

ナルトはポカーンとしてた

まあね・・・うん

「まあ、もっと詳しく言いたいけど・・・ナルトが分かってないから大きくなったらまた、出てくるよ」

「」「」「あ！！！」「」「」

今度会つのは・・・戦争ぐらい？

また考えておきます
by 作者

「じゃあね。2人とも」

そついい父さんはあたしと、ナルトの頭を撫でた

「また会いにくるってばね！」

「ぐえ!!!」

抱き着くの・・・カいれすぎ・・・

「」「じゃあ」

ポン!!

消えた

いま思ったんだけど・・・ナルトの抱き着くせって母さん似？
でもそれって家族だけだし・・・

あたし、そんなに気にしてないしっか！
いやしろよ！！

「えっと・・・まあいろいろ事情は分かった。」

「そういう事で今日は解散という事で・・・」

「そうじゃ！！中忍試験のこと考えておかないと・・・ぶつぶつぶつぶ」

「「「「失礼します「「「

あれ？

いま思ったけど・・・

白とあたしって??????

その辺にあった電信柱に向かってグーパーチ！

力抜いて電信柱に大きなひびが入っていた

周りのみんなあらびっくり！

拍子抜け？っていうのかな？？

「あとのことは自分で？ってマジっせえ！！会ったらせってえびっ
殺す」

やってくれたねえ・・・

m e e . a a g g . m m i i

「おい・・・セツナ?どうした?」

は!!

カカシがおいおいみたいな目で見てくる

「別に!」

悪いな今のあたしはキゲンが悪い

「うーん・・・」

ナルトが何やら悩んでいる

「どうした？ナルト」

「いや・・・俺ってばセツナってよんだらいいのか、姉ちゃんって
いえばいいのか？？」

「あたしは別にどっちでもいいわよ。」

「じゃあ！セツナで！」

そっぴい抱き着いてくる

これお約束になっちた（笑）

「りょーかい！」

そっぴいあたしも抱き返すのだった

真実（後書き）

ps

後日ナルトはサスケににらまれるようになったとかないとか・・・

「ってかあたしと白の関係どーしたらええの!????」

「それはまた考えておきましょう!あ!どうも作者です。」

「どうでもいいわい!」

「いつも見てくださりありがとう」<「>」

「無視?」

「できれば感想なんかほしい ゲボオ!」

「無視すんじゃないね!じゃまた見てネ」

くじ引き(前書き)

あい!

もう、原作スルーして自分風の中忍試験にします!
ちゃんと木の葉崩しは実行しますが (^o^)

後日

ああ~~~~、んもう!!

あたしと白はどんな関係にしたらあ!

あれから、別に何事もなかったように白と接してる

でも・・・”なにごと”もなかったっていうのは・・・

でも白はいつから、あのこと知ってたんだろー・・・

知っていたのに・・・何事もなかったように接してくれて・・・
白って本当にやさしいなあ！！

こんなことをいつも考えているうちに寝られなくなっていました

ああ！

ダメだ！

こんなに寝られない日続いたら仕事にも差し支えるっーの

やめだ！やめだ！考えるのやめよ！

次の日

「おはよう」

「……」

「せ……セツナ目のくま……どうしたの？」

「大丈夫ってばよ？」

「それで仕事行けるのか？」

「（まあしょうがないわな）よし！全員そろったな！今日の仕事は牧場主の手伝いだ！行くぞ」

「つてただ寝てなかっただけじゃねーよ！」

「ちやーんと寝不足ナオール作ってたのだ！飲んだ瞬間寝るとかいうオチはないよ！」

「もう飲んだし」

「ってかくま、もうないし！」

サクラ ナーイスつつこみ！

「あははは！…まあこんぐらの病気？なんて薬で作れるし、医療忍術でなんとかなるよ。」

んで笑う

「意味わかんねーってばよ！…！」

「ぶん」

「しゃべってないで歩く！」

「はい…！」

しばらくして中忍試験の二次試験合格者はアカデミーに来るように
言われ
集まった

「えーみんな集まったようじゃな。まず木の葉16名 砂3名 音3名……」

木の葉はカカシ班、アスマ班、紅班、ガイ班　そしてカブトの班
砂は我愛羅のとき　音はまああれ
名前は忘れたけど、分かると思う

「ここで第三試験の出場者を決めるためくじ引きで当たりを引いた者だけが出場できる」

「なるほど……運ってことですか。」

「セツナ、正解じゃ！運も実力のうちじゃからな！！」

「セツナ？おはなではなかったのか？？何が起こったんだ」

「(テマリ、あとで聞きに行こっじゃん)」

「じゃあ私が回るから一枚だけ引いてね？どれか当たりなんて見ようとしたってムダよ

結界術があるから？あと開けてっていうまで開けちゃだめよ」

アソコさん・・・大蛇丸化してますよ？

ってかあの術あたしがかけたやつ！！

あのタメに呼び出されて術をかけさせられたの？

．．
そっか、確か母さんの得意な術でその血があたしにも流れてるのね．

「しむ、みんな引いたよじじゃのづ。では開けてよいぞ」

じむ？

当たり

「……」

「セツナも当たったのか？」

「ナルトも？」

「ああ！」

「「「イエイー！……」」」

2人とも満面の笑顔で抱き着いてる

「サスケは？」

「ん」

当たり

「おー！！」

「サクラちゃんは？」

ドーン

暗い

ってことは……はずれなのね……

「ナニト……さびしく……な……」

「では当たった人、紙を持って前に出てください。」

ぞろぞろ

「名前を言ってくれ」

「うずまきナルトだってばよ」

「うずまきセツナです」

「うちはサスケ」

「薬師カブト」

「奈良シカマル」

「ロック・リーです！」

「日向ネジ」

「我愛羅」

「テマリだ」

音全滅ってか

まあ木の葉ほとんど当たったしね

「うむ、以上が第二試験出場者じゃ！前に貼ってある紙を見よ」

うずまきナルトVS日向ネジ

テマリVS奈良シカマル

うずまきセツナVS薬師カブト

我愛羅VSうちはサスケ

ロック・リーは我愛羅とうちはサスケの勝負で勝った者が相手となる

っしゅ！きたあー！！

「まさか君とはね・・・」

「は！カブトてめえを生きたまま三途の河渡らしてやる」

くじ引き(後書き)

まさかの宿命対決？です

(^ o ^)

自来也って本当にヒロイよね(前書き)

タイトルはまあ・・・思いつきですねん

気にせんといってください

自来也って本当にヒロイよね

まさか、相手がカブトとは・・・

ふふふ・・・

この一ヶ月死ぬ気で特訓するぜ！！

ナルトは原作だと自来也に会うはず！！

あっしもまた修行つけてもーらお！

「おい」

「ん？？？」

「テマリだ!!」

「テマリ!おひさま!」

「お前なんで姿とか名前とか変わってんだ?」

「ってかナルトと同じ苗字じゃん。」

「うん姉弟」

「なに!?!」

「知らなかった!?!?ごめんごめん!?!」

「知るわけねえじゃん!！」

「ぶひひひ。」

「俺は馬じゃねえ!！」

「カンクロウ落ち着け。そういつことか。じゃまたな」

「ばーいばーい……」

「姉ちゃん帰るってば」

「あれ！???ナルト、セツナじゃなくなったねえ」

「みんなに普通は名前で呼ばねえだろ！って言われた・・・」

「まあ、そうだろうね。じゃ帰ろうナルト!」

あ！

途中まで帰ろうって意味ね!!

「姉ちゃんは修行すんのか？」

「うん！自来也さんにつけてもらおうと思っ……」

「自来也？？」

「あんたもつけてもらおう？」

「……おっ……おっ……」

「うーし……会いに行くよ」

自来也
SIDE

んふんふ？

おお！あの子はケツ、プツリプツリじゃのう？

いやめずらしく今日は大当たりじゃわい！！

いい小説のネタになった

セツナも将来絶対、美人で、ばいんばいんのプツリプツリになるの
う。

「将来が楽しみじゃわい!!」

「……って何してるってばねえ……」
「……お……」

「お……」

だ・・・ダブルキックとは痛い・・・

特にセツナ・・・お前本当にミナトの血が流れてるのう

かしこいのもな・・・

特に笑顔が・・・

「お？その隣は誰じゃ！？？」

顔はミナトに少し似ているのう・・・

まあミナトと違ってバカの顔あるが・・・

「ああ、弟のナルトと一緒に修行つけてもらおうと思って・・・！」

なるほど・・・

こいつは将来男前になるのう。

「別にいいが・・・」

「「・・・」」「「・・・」」

場所かえて第20練習場

「あゝ……はらら」

「……うんうんわけて修行しててなっつてはあ……」

SIDE STAFF

自来也って本当にエロいよね（後書き）

作者「どうもですー！えーここで皆さんにお知らせですー！！
質問とかある人ー！！バンバンください。セツナとわたくし作者でお
答えします」

セツナ「ということですよ！できるだけネタばれ発言は引きかえてく
ださい。」

「「おたより待ってマース！」」

いきなりその技きたー(・o・)!!(前書き)

はい!報告です!!

中忍試験終わったらせツナがあんなことして疾風伝いっちゃんいます

(*^^^)(v

ズ...

別に書くのめんどごとかそんなんじゃ... (嘘つけ!)

いきなりその技きたー(・o・)!!

「では修行メニューを今からいう!!」

「おっじゃー!!」

「なんでもこいってばよ!!」

「まず質問だが・・・二人とも水面歩行と木登りはできるかのう?」

「「なんのできるに決まってるってばねー!（っってばよー）」

ナルトは原作より強いです

「ナルトもか!?!?」

「で・き・る・!姉ちゃんと一緒にそれで遊んだりしたってばよ!
!（木登りは最近だけど）」

自来也さん・・・あんなマジ!?!みたいな顔になってるよ・・・

ナルトを見くびりすぎ・・・

「そうか・・・ならばこの修行じゃ!」

そついい手のひらに空気を集めだし丸い球になった。

「螺旋丸!」

ドコーン!...

その辺にあった木がボロボロになっている

「す……すげー!!」

「木の割れ方が……そのまま丸く円状に割れて……」

「セツナ!いいところに目をつけたのう!……ミサトに似ておる。」

「父ちゃん知ってるのか!??」

「ああ！わしの弟子だった。ちなみに螺旋丸はミナトの術でわしも
会得したんじゃ」

「「嘘！！」」

「あれ？セツナも知らなかったのか？」

「さっし」

「……」

なんか落ち込んで・・・

「と・・・とにかく！螺旋丸をやってみる！！（まあ、一番最初は無理じゃろっ）」

「よし！」

確か手のひらにチャクラを集中して・・・

「あれ??セツナお前左利きか??」

「うん。綱手様に治してもらったけど、無理はするなって・・・」

んで集中!!!

お!!!

自来也さんの青じゃないけど、薄緑のんできた!!!

「あ!!!姉ちゃんできたんじゃないかっつてば!!!??」

「ま・・・まさか一回見ただけで、できるとはのう。」

「次は俺だつてばよ!!!」

ナルトは何十回か失敗してたけど50回目くらいでできた。

「うっし！できたあつてばよー！..」

ナルトのんは青

「よし！それを木に当ててみる」

「螺旋丸！！」

バキ！！

ちやーんと自来也さんみたいに普通に丸く穴が開いた

「やったあ！エロ仙人みたいにできたつてばよ！」

「あたしも!!！」

「「イエイ!!！」」

抱き着く2人（笑）

「エロ仙人つて……がく……」

「そうだ！」

「どうしたってばよ？」

「螺旋丸作って2人でチャクラ融合？的なこと言って2人で大きい螺旋丸作らない？」

「いい！！それいってばよ……！」

あたしは左利き、ナルトは右利き

ちよつどいいじゃん！！

「行くよナルト！！」

「おっ！！」

ぎゅるるる

2人とも螺旋丸を作る

そして

「「チャクラ融合!!」」

ぎゅんぎゅんぎゅん!!!!!!

そして合体した螺旋丸

色は薄緑と水色？があわさってキレイ・・・

「このままどっするってばよっ」

「一緒に打ちにいくのもいいけど・・・ちょっと考えがあるの！ナ
ルト手離して！・・・」

「..お」

「（セツナは何をするつもりなんじゃのうっ？）」

よっ..！..！

すごい高密なチャクラ・・・これをコントロールして投げる

1人で打つには女のあたしには無理

そして投げた後チャクラコントロールで動かす

水遁とか火遁、すべてのチャクラ変質できてそれも技をしてチャクラコントロールで操った！

これもやればできると思う

「ダイナミックじゃーい！ー！」

そして投げる

投げれた！！

このまま操る！！

さすがに少ししんどいけど

「やって見せる！」

右！

右に動く

左！

左に動く

とまれ！

止まった

「で……できたってばね……！」

「なんじゃって……」

「姉ちゃんすげえ……！」

このまま投げてその辺当てたらこれはそうとうな破壊力になる・・・

そのまま螺旋丸を当てず、解いた

映画「ザ・ロストタワー」で自来也がミナトに螺旋丸を見せて螺旋丸をすうってなくした感じの奴！

「この術なんて名前にするってばよ!?!?!」

「うーん・・・融合螺旋丸とか？」

「いい! それいい!」

「よし! 決定ね!」

「まさか初日で、できてオリジナルの技作ってしかも高密度なチヤクラをコントロールしよった
投げるなんて・・・こいつは2人とも将来が楽しみじゃのう」

「うわ！なーにエロ仙人にやついてんだってばよ・・・」

「もしかして・・・まーたエッチなこと考えてんじや・・・」

「違うわい！！」

「それより、もう夜ね・・・」

「今日は一楽に決まりだつてばよー！」

「よーしーおじっつてやるじ。」

「やったー！！食費が浮いた！！」

「ラーメン？ラーメン！！」

「食費が浮いたって・・・のう・・・」

いきなりその技きたー(・o・)!!(後書き)

あとがき

一応言っとくけど・・・セツナはもう口寄せできます。

何を呼び出すかは・・・

また話にでてくるので、お楽しみに？

それではまた次回！

プリンはカaramelがなかったらつままない(前書き)

今回は一楽から始めます) ^o^ (

タイトル思いつかないときこんな感じのタイトルにするんで)* ^
^ (v

プリンはカラメルがなかったらつままない

「いっらっしやい」

幕を開けるといつもの親父さんが立ってその横にあやめさんがいた

「なんだまたお前たちか。」

「今日は何する?」

「味噌チャーシュー大盛り!!!」

「とんこつチャーシュー大盛り!!!」

「醤油チャーシュー大盛り！！」

上からナルト、セツナ、自来也

「全員大盛りなのね」

そういいあやめさんが笑った

もち自来也さんがあやめさん口説こうとしたが……

「何してんじやい……」

って2人でハリセンでぶっ叩いた

「それにしても2人とも・・・えらくかしのう。」

「そうだろ！！俺ってば実はドベ、頑張って演じてたんだぜ?？」

「それまたなんで?？」

「小さい頃から姉ちゃんに修行つけてもらってたんだ！！けど姉ちゃんがいきなりその力を
発揮したら暗部の人にKO・RO・SA・RE・RUでしょ!?!?っ
て言われてたからよお・・・」

「まあそうじゃのう。ハッキリ一回見ただけあそこまで行くとわしの立場ゼロじゃ!?!?!」

「そうね。で・・・明日はどんな修行を??」

「口寄せを教えてやるつもりだと思っとな。」

「ラーメンお待ち」

「あーどうも」

「味噌ちゃーしゅ」

「久しぶりだのう。」

んで修行中

やり方とかは原作通りで
ご想像におまかせします

日は暮れ夕方

「うし！ナルト、セツナ最後にありったけのチャクラ使って口寄せしてみんかい！！」

「「りょーかいだってばね！（だってばよ！）」

「「口寄せの術！！」」

ボン！！

ナルトは親ビン

セツナはキレイな色をした真っ白な兔を口寄せした

「なんじゃい！この小僧がわしを口寄せしたんか！？」

「正解だつてばよー！！」

今のナルトは汗だくで紙が少し乱れていて髪型がミナトに近かった

「な……」やっは……」

「そう、ミサトの息子だのつ。ちなみにその横にいる女もミサトの娘」

「なるほどな。」

「うへー！！すごい大きくてきれいな鬼だあ……」

「あなたがわたしを口寄せした者ですね？わたしはいずみと申しま
す」

「あたしはセツナです！ヨロシクね」

ポン！！

「大きかったらチャクラの消耗が激しいので小さくさせて頂きました。」

ちなみに今のサイズは普通の兎と同じ大きさだ

「その姿でこれから出てきてちょうだい」

「分かりました」

で契約に印を押して終了した。

そして数日後

いよいよ中忍試験第三次がある日になった。

第一予選？はナルトVSネジ

まあ・・・これまたネジはナルトを少しなめていたようで
螺旋丸をうまくくらって瞬殺。

まあナルトもそれなりのスピードを出していたから、写輪眼でも難
しかったと思う

「やったってばよ！」

「おめでとーナルト！修行の成果でたね」

「ナルト君おめでとう。」

「ヒナタありがとな」

「う・・・うん」

ヒナタさん、顔赤いよお??

つま見てた人やカカシ先生などの上忍も驚いてた

原作と違いサスケとカカシ先生はすぐ来た

んで地味に自来也さんいた

「あ！エロ仙人！！」

「でっかい声でいうな！！」

「自来也さん・・・もしかして螺旋丸を・・・」

「よお！カカシ久しぶりだのう。」

「まあな。螺旋丸はセツナとナルトに教えただが・・・あのスピードのはビックリしたわい。」

「まるで黄色の閃光・・・」

「多分セツナが修行を付けたと思うのう。セツナは本当にびっくりした。一回みただけで

螺旋丸完成して、ナルトとオリジナルの技作ってチャクラコントロールで螺旋丸を操ってた。

わしもできんし、多分ミナトでも難しいと思う」

聞いてたいの、サクラやそのほかの同期のメンバーが驚いている。

「うっそ！ナルトがあ！？」

「そんな・・・」

「まさかネジに一瞬で勝つとは・・・ナルト君素晴らしいです！」

「そうだ！わたしも感動したぞ！！リー！！」

そういつて2人で腹筋しだした

・・・バカだろ？

「ナルト・・・お前なんかアホ面抜けたな・・・」

「ん？そうか？？ありがとなシカマル。」

そういつてやさしく笑うのはセツナとミナトそっくりだった。

b y 自来也

「カカシ先生」

「ん？なんだセツナ？？」

「サスケに雷切り教えてたの？」

「！！なんで・・・」

「あ、やっぱり？？」

で・・・視線を風影と火影に移す

風影・・・大蛇丸のチャクラの感じがする

「自来也さん？」

聞いてみたが・・・

「ん？なんなのう？」

「いや・・・気づいてないならいいです。」

「何をだ？」

うーん・・・言ったら絶対戦うよね？

「次の試合！予定を変更してシカマルVSテマリです！選手入ってください」

「「「な？」「」「」

ち！やっぱりそう来たか・・・

次はあたしとカブトだったんだけど・・・

「() どうしよう・・・姉ちゃんが真剣な顔で殺気レベル3だったば
よ・・・」

「なんで変更だ？」

アスマがいう

「シカマル！早く行って来い」

「な！？セツナ！？！？」

いのがなんでって顔でいう

「いいから！早く行け」

「あ・・・ああ・・・」

シカマルは は？みたいな感じで走って行った

あたしとカブトの戦いを遅めたのは絶対こうだ

シカマルとの対戦後あたしとカブトを戦わせ、大蛇丸は火影を殺したあと

カブトはあたしを限界までチャクラを使わせ試合終わりとわざと負け油断したすきに気絶させ

あたしを連れ帰る……

そういうことが考えられる

「うち！どーせ結界術を使う奴等がいて暗部の者も戦えないようにしようってことか・・・」

もっと封印術、結界術、医療忍術も修行しとくんだった！

最近、忍術と体術しかしてなかったし・・・

ナルトも封印術、結界術を使えないし、当然結界を破ることもできない一応幻術返しは修行させたけど・・・

「んちくしょうが……！」

思わず壁を殴りかけたが壁を一枚破壊してしまった

「どつした？セツナ」

カカシ先生……あんた何もマジで知らねーか……

「言っけど……警戒はしないで。」

「あぁ、言ってみろ」

「あそこにいる風影は大蛇丸です」

「「「「「えええええ！？（何だと！？）「「「「「

「おいおい……いんのかも驚いてびびるぞ」

プリンはカaramelがなかったらつままない(後書き)

はい！終わり方悪いけどまた次回！

あじゃぱー(* ^ ^) v (黙り よー)

逝くもの(前書き)

ひゃっほー!!!

こんにちわ(^o^)

いやああああー

早く中忍試験のとき終わらして疾風伝行きたい!!!

逝くもの

「それはどういふことなの？！セツナ」

「いや、だから大蛇丸が風影。大蛇丸が風影殺して大蛇丸は風影に化けて今三代目の横にいる」

「「「「「な！？」」」」」

「本当だ・・・チャクラの感じが邪悪な感じがするってばよ。」

「そんなのあんた分かるの？ナルト!!」

「サクラ。少し黙ってて！あたしもナルトもこの1ヶ月ムダにしてきたわけじゃない。」

「……」

「で話を戻すけど、シカマルとの試合の後あたしが試合に呼び出される。あたしとカブトが戦っている

隙に大蛇丸は観客のみんなを幻術にかけ、三代目と戦い勝負がついたらあたしを気絶させ

アジトへ連れて行く……という設定じゃない？」

「ありえるな。」

どこからともなくいきなり綱手とシズネが現れた

え・・・？

あんなさんの出番もう少し先じゃ・・・！？？
by 作者の仕業です

「綱手!？」

「久しぶりだな。自来也」

「確かに、木の葉に結界術を使える者はいますがセツナほど使える人はいないでしょうね」

「そう!シズネの言うとおりだ。大蛇丸もそれなりの部下は連れてきているはずだ。少なくとも結界術は優れている4人はいる。」

「姉ちゃんなら1人でもいけるけどな」

「いらん」と言わんでよろしい!」

バキ！！

「いったあ！！！」

「強くなっても頭のとこはあまり変わってないな」

「うるせえ！キバ」

「んだとお！？」

「まあ、とにかく上忍何人かは三代目のそばにいた方がいいわ」

「紅の言つとおりだ！！青春パワーでがんばるぞ！！」

「あ！シカマルリタイヤしたみたいだよ。もぐもぐムシヤムシヤ・・・」

「うっそお！？アイツ何してんのぉ！？？一発しめてやる」

「いのこわあ！！
目がこわい
！」

「もう！いのかわいい顔してんのに怒ったらダメよ。」

「セツナったらもう上手なんだから！！」

とかいいつつけっこ顔にやけてる

「ふー……めんどくさかった……」

「シカマル！あんたねえ！！」

「はいストップ！いのさっきも言ったけど……」

「あー！」

「サクララ？どうしたの？？」

なんとなく聞いてみる

「そついえば、シカマルとセツナってむっちゃくちや仲悪かったのに最近ケンカしてないよね？」

「「確かに・・・」」

はもったあああああああああああああああああああ！

「あときは若かったんじゃない?」

「ばーちゃんみたいなこと言わないの!」

「いのナイス突っ込み!」

「意味わかんないわよ!」

「まゝ理由としてはめんどくさい……ってまたはもった!」

「あんたたち本当仲いいわね!」

「うんムシャムシャ……」

「チヨウジ食べるかしゃべるかどっちかにしろよ……」

「ごめんシカマル。ムシヤムシヤ……っばい！」

チヨウジのそばには袋がたんまりと……

その瞬間だった

目の前に天使の羽がまいてきて眠気が誘う

！

幻術！！

急いで印を結び言っ

「解！！」

やっぱりそうだ！

観客が寝てる

起きてるのは上忍とシズネさん、自来也さん、綱手さん

下忍ではサクラ、ナルト、あたし、シカマル

我愛羅とテマリ、カンクロウは原作と違いどうやら何も知らないように起きている

我愛羅は暴走し始めてる

木の葉崩しは音と大蛇丸だけで行うのね・・・

あたしは急いで三代目の元へ向かう

グサ！！

床にクナイが突き刺さっている

「カブト!!!!」

「大蛇丸様の邪魔はさせないよ!!」

「つちい!!」

「真正面に向かってくるとは思わなかったわ」

ナルトは我愛羅の元へ暴走止めに行った

「当たり前だ君に僕は倒せない。いや・・・その前にこれを見せよう」

「何!??」

ドス！

目の前にいるのは血まみれの白だった

「嘘……」

「嘘じゃないよ。現実だこれは僕がやったんだよ。」

白が……白があんたに負けるなんて……

あたしは急いで白のところへ走った

よかった。まだ息はある

「シカマル！白を安全な場所へ！」

「分かった！」

「あたしも！」

サクラ、シカマル・・・たのんだわよ

いま見たらサスケも我愛羅のところにいた

ドスン！

三代目の方を見たら何か木が立っていた

ナルトの方は早くも我愛羅がたぬき寝入りに入っていた

はやあ!!

「もうすぐで大蛇丸さまのとも終わる。話はこれでおしまいだ」

そついい手にチャクラを集めだした

「しるせえ……お前はマジで殺す」

もう限界・・・

何の関係もない白をあんな目に・・・

殺気レベル、戦闘モードとも5！

(10までいったらチャクラもつたいない！)

「安心しな・・・一瞬で終わらせてやる」

「な!?!?!」

カブトは地味にあせている

あたしの殺気を感じに上忍もびびっている

自来也さんと綱手さん、シズネさんは大蛇丸の元へ行った

「螺旋丸！」

「..# 333」

..333

カブトはもろに食らった

けど腹にダメージがいっただけ回復する前に手を打つ

水がないここは水遁も限られてくる

なら!

「雷遁 雷銃弾!」

どんな技かは想像におまかせします

ドドカーン……！

「はあはあ・・・どうやら、大蛇丸様の方は終わったみたい・・・だから僕も失礼・・・するよ」

ポン！

「まったく逃げるのは早いんだから・・・」

本当は大蛇丸のそこへ行きたいけど白の治療をしなきゃ・・・

「白！」

安全なところって言っても観客のうしろにいた

「姉……さ……ん」

「待ってて。すぐ治療するから」

ケガが見えない

涙がにじんで

でもよく見るとかなりの重症・・・

腹の出血がかなりひどい・・・

でも！あきらめない！！

チャクラが尽きようと絶対あきらめない！！

集中しても集中しても血が止まる気配はない

そのうちあたしの周りには疲れ果てたナルト、サスケ我愛羅にテーマ、カンクロウ

自来也さん、綱手さん、シズネさんも帰ってきた

どれだけ集中しても止まる気配のない血

そのぶんの涙がこみあげてくる

「姉さん……もう……いいです……」

「良くない！あたしのチャクラ尽きてもあたしはあきらめない！」

「再不斬さんも・・・死んだんです・・・カブトにやられ・・・姉さん・・・僕は姉さんのことを尊敬しています・・・僕にとって姉さんは・・・実の姉妹
じゃなくても姉さんです。僕の大好きな・・・今まで本当にありがとうございました・・・」

「ありがとうございます・・・こんなあたしを・・・尊敬してるって言うて

くれて・・・
大好きって言うてくれて・・・あたしは一生 白のこと大好きだから!!」

そっういい白は笑い目を閉じた

あたしは上げたこともない声とあふらだす涙が止まらなかった

「うわああああん!!」

そしてしばらく泣いていた

ナルトもサスケも幻術から覚めたいのたちも綱手さんもみんな暗い顔でただあたと白を見ていた

そして三代目 猿飛ヒルゼンの死もあり、みんなうつむいて暗い顔をしていた

逝くもの(後書き)

話しの内容暗い!!

p s

綱手はなんで今の綱手？
ということですが・・・

原作でナルトと綱手が賭けをするでしょ？
あれを螺旋丸じゃなく違う技でかけていたのことです！

原作の奴が何年か前にあったと思っといってください

火影は予想通りでよろー) ^o^ (

決意（前書き）

今回は少し暗いです（^ー^）
（^ー^）

決意

あれから数日

三代目と白、再不斬 今回の戦いで失われた人の葬儀が今日行われる

そしてセツナ、ナルトは白がいなくなったので一緒に暮らすことになった

「姉ちゃん、時間だってばよ行こつ。」

「うん。今行く」

あたしはあれから長時間泣いていた

なので決めた

泣くのは最後にする

あたしたちは葬儀の行われる場所まで行った

そしたらみんなはもう着いていた

木の葉丸は泣いていた

まあそりやおじいちゃん死んだら泣くわな。

あたしは泣かない

とつか暗い顔もあんましない!!

みんなから見ると強がりに見えるけどこれでいい

そしてあたしは1つ大きな？決断をする

修行の旅に出る

あたしがもつとしっかりしていれば白と再不斬は死ななかつた

「おい、お前から花ちゃって」

カカシ先生に言われて気づいた

もうあたしたち下忍の番なのだ

いつのまにか雨がやんでいた

そしてあつというまに葬儀が終わった

いるか先生なんか言ってたと思うけど聞いてなかった

「姉ちゃんそねじゃ帰るってばよ」

「ふっ」

帰ろうと思ったところに綱手様が呼んだ

「シカマル！セツナ！ちょっとこい！！」

え？？

もしかして・・・

アッコさんとかイビキとかいるんだけど！

「おめでとう。今日からお前たちは中忍だ。」

はい！

来た

！！！！！！

え！？嘘！？

ベストとかあんま着たくない！！

いいよね！？

紅先生だっ
てきてないし！！

そうだ！！

旅のこと言っておじい！

「綱手様！ちょっといいですか？」

「?なんだ??ベスト着たくないんだったら別にいいぞ。」

「よっしゃ!っってそっじゃなくて!?!」

真剣な顔でいう

シカマルとかまだいます

網手SIDE

「修行の旅に出る許可をください」

「「「「「! ! ! ! !」」」」」

「セツナ・・・白と再不斬のことだがわたしも三代目のそばにいなから結果はあれだ。
未熟でくやしいのは分かる。だが」

「確かにそうです。あたしがもっとしっかりしていれば、死ななくてすんだ
それにもとはと言えば、あたしがまいた種ですし・・・でももうあんな思いするのいやなんです!
もう

誰も失いたくないんです!!」

「!!」

「セツナ・・・お前は本当にクシナとミナトに似ているな」

「え？」

いやナルトも似ている不思議と賭けてみたくなるからな・・・

「いいだろう！ただし！！音隠れ、大蛇丸のもとへ行くのは禁止とする

あと2年以内に帰ってこい！！いいな？」

セツナはえらく満面の笑顔で言った

「はい！」

SIDEアウト

うっしゅー!!

まず・・・旅に出るのをみんなに言おう

そして出る

「なぞなぞっちりじゅっちりっ！」

決意（後書き）

次回 感動の別れ！？？

ほーたーるのひかり窓の

(前書き)

ははh!!

覚えてないぜ(^o^)

つーか卒業式うたったの「旅立ちの日」?

やったし!!

ほーたーるのひかり 窓の

でも、ナルトに旅に出ますー！

っつたら絶対ついてくると思っんで……

こっそり置手紙残していいこう(笑)

うん！これしかないんだ！！

深夜12時

置手紙を残し必要最低限の荷物を持って出ていく

ごめんね・・・ナルト。

田中ノリ子...

なぜかサスケ発見

ってかベンチにサクラ寝てる・・・

なぜ？？

「セツナ・・・」

「あれま？サスケ？？どうしたの！？？」

「それは「うちのセリフだ。」

「あたしね修行の旅に出るの。2年ぐらいで帰るつもりサスケは？」

「俺は里を抜ける。」

「はい!??」

「今のままだとイタチには勝てない。だから里を抜け力をつける」

「そっか・・・さびしくなるね・・・」

少しがっかり・・・

そうするとサスケは顔を赤くしせきばらいをしていた

「いや・・・でもいつか里に帰ってくる・・・それかお前に会いに

行くから
「

「ほんとう!???よかった!!」

サスケは顔が余計に赤くなった。
熱あんじゃない???

「ほんじゃね。」

「ああ」

ナルトSIDE

朝起きるといつものご飯のおいがない

おかしいってばよっ？

いつもはそのにおいで起きるのに・・・

不思議に思いリビングに行くともテーブルに大きい分厚い封筒と朝飯
がおいてあった

封筒開けると

ナルト

サクラ

カカシ先生

ヒナタ

いの

シカマル

など俺ら同期の名前の手紙とその先生名前の手紙があった

あとエロ仙人と木ノ葉丸のんだ

心臓がどきどきしてる・・・

俺は急いで着替えて日頃セツナにきつく言われて来たせいか
鍵をしめ手にはみんな宛ての手紙と封筒を
持って走った

そして「あん」と大きく書いてある門に行った

息切れをして姉ちゃんからの手紙を見る

女の子らしいかわいい字・・・

間違いなく姉ちゃんが書いたものだ

”愛する弟へ”

いきなり驚かせてしまつてごめんね。

姉ちゃんは修行の旅に出ます

きっかけは、白と再不斬が死んで自分の未熟さに腹だてたからです
それにナルトの中にいるものをナルトに悪影響をかけないよう九尾
のチャクラを操る
力もつけるためです。

勝手に何もいわず出て行つたばかな姉を許してね。

きっとナルトに言えば俺も行く！って言うと思つたから・・・

今回の旅はあたし1人でしたいのので勝手に出て行きました

あなたも自來也さんに修行をつけてもらったらいいと思うわ

それとあたしがいないからって夜遅くまで起きないこと！

早起きは三文の徳！

掃除もゴミもめんどくさがらずちゃんと毎日しなさい！

ご飯もラーメンばっか食べないこと！

洗濯もためず毎日しなさい！

あと布団もお天気の日には干すこと！

出かけるときは鍵閉めを忘れない！

任務では仲間を信じあんまり迷惑をかけちゃダメよ！

以上のことを絶対守りなさい。

あと白と再不斬の墓・・・手入れしといてね

あたしは2年で帰る

だから心配しなくても大丈夫

最後まで口づるさなくてごめんね。

” セツナより ”

「本当に・・・ロウめんをこっぴごめ」

「ナルト？何してんだ？？」

「シカマル？」

「ナルト？なんかあったか？？お前なんかすっげー暗い顔してんぞ？？」

「いね」

「ん？」

俺はシカマルに手紙を渡した

ほーたーるのひかり 窓の

(後書き)

はい！！この続きはサスケ奪還任務です！

気にしないこと！

それではまだもう少しセツナがいなくなった木の葉の里のこと書いて疾風伝行きたい
と思います！！

ラーメンってほんとくとマジで量増える(前書き)

タイトルの意味特にありません！

ラーメンってほんとくとマジで量増える

セツナがいなくなったことはすぐに里に知れ渡っていた

それと同時にサスケが里を抜けたことも

ナルト SIDE

しばらく落ち込んでたがエロ仙人とカカシ先生やシカマルの励ましのおかげで
なんとか立ち直ったってばよ！

サクラちゃんに手紙を渡し見ているときの表情を見ると

サクラちゃん、ヒナタ、いのは泣いていた

テンテンはすっげえ暗い顔してた

エロ仙人と俺ら同期の先生たちは難しい顔していた

綱手のばあちゃんにみんな責めてたけど

「セツナは強くなって帰ってくるに違いない！お前らは素直にセツナが強く帰ってくることを信じて待つてはおらんのか！！」

と一括され

シズネの姉ちゃんは

「綱手様はああおっしやていましたが、綱手様も旅に出ることを反対されていたんです。もちろん里を出て行ってさみしいと思うのも一途あるのかもかもしれません。」

私もそうです。

これからは手伝ってくれる人がいなくなったりすると……。」

もうここからはほぼ愚痴

で

今からサスケ奪還任務だつてばよ！

絶対連れ戻して見せる！！

そして2年後

S I D E セ ッ ナ

髪は背中までのびているもち色はそのままですトレート、前髪は母さんみたいピンでとめようとおもったけどそこまで伸びてないから

前髪を感じを母さんに似せて足りないところを編み込みをしてペンでとめてる

服もち新しいのん！

前回同様で違うのは着物の柄が花柄になって額あてを長くして帯がわりに使っている

下は左もものところが縦にせんを入れて見えている状態ひだりももが

黒スパッツははいています！！

腕は上腕から指の第一関節まで黒い手袋

荷物はリュック！

で久々に里に帰る

「あん」と書かれた門をくぐる

「本当に久しぶりだってばね!!」

特に変わってない里

ちっさく綱手ちっさくのとりに行くとしませるか！

ラーメンってほんとくとマジで量増える(後書き)

はい！

来ましたキヨシ！(意味わかんねえよ！)

ついに疾風伝！

マジで久しい感じ！！やっほお！（前書き）

上のタイトルは作者が思っていることです。

それでわレッシンゴロー！

マジで久しい感じ！！やっほお！

わっわっわ・・・

綱手様のとこ行くと思いますか。

コンコン

一応礼儀正しくノック

「入れ！」

お！綱手様の声懐かしいな〜！

「失礼します」

ガチャっとな

「セツナ!？」

「はい。ただいま戻りました」

そんなにビックリするかな・・・？

「セツナ!？」

「ん?おー!サクラ!!お久ー(^ O ^)」

「もう!勝手に出て行かないでよお!ばか!」

「んじふ!...!」

抱き着かれる力が半端ねえ・・・

「じめん、ごめん！」

「お前本当に顔はミナトで髪はクシナだな・・・前髪をあみこみしてなければクシナと間違えていた」

「そうですか？あんま身長ものびてないし・・・ナルトは？」

「ナルトもしばらくしてから自来也と修行に出たって。もうすぐで2年だ」

「そつですか。」

「セツナ・・・サスケ君が・・・」

「サクラ知ってるよ」

「え!??」

「実を言つと・・・出ていくときサスケに会つたの。止めてもムダだと思つたから」

「そつか・・・で修行の方はどうだった?」

「ふふん!新しい術作つたし、医療忍術と封印術もばっちり!チャクラを抑えるのもちゃんとしたし!」

「ほう！そうか！じゃあ・・・お前上忍試験受ける」

「はい！??？」

「お前なら大丈夫だろ。」

「えー！???. . .いつですか？」

「今から」

「なにー！?」

おいおい！試験内容やべーんじゃ・・・

で試験場に行つて試験をしましたとさ

内容はシークレットで

試験後

あーで結果……

上忍になった人 あたし ネジ

だけかよ!??

「セツナ!!!」

「おー!いの! (その他ナルト以外の同期と先生)」

「帰ってたのねー！」

「ぐっふー！」

いの・・あんたも カクソ強い・・・

「セツナちゃん！上忍おめでとう」

「ありがとう。ヒナタ」

「お前も俺と同じレベルなんてねえ・・・」

「カカシ先生！」

「しかしお前これまたクシナさんとミナトさんにそっくりだな・
」

「綱手様にも言われた。」

・・・シカマル・・・背伸びただけであとあんま変わってない

「あ？なんだよ？」

コイツってイメチェンとかしないタイプだな・・・

「セツナ！」

「テマリ！」

「お前も上忍か。」

「へへ！っておお！??？」

そーいやシカマルとテマリって仲いいな・・・

なるほど！そーいうわけね

「それにしても髪長いなあ。」

「うん？切った方がいい??？」

「「「「「いやいや！そーいうことじゃなくて！...」」」」」

みんなに全力で拒否られた（笑）

「そーだ！」

「何？いの？？」

「セツナ！一緒に焼肉行かない！？？久しぶりに話したいこといっぱいあんだから！」

「賛成！！！」

「あたしも行く！」

「わ・・・私も行きたいです・・・」

「じゃあ、あたしも行くかな。」

で夜遅くまで話たとき。

マジで久しい感じ！！やっほお！（後書き）

次回いつきにナルト帰ってくるよ！書くよ！！

再会ってか!! (前書き)

はい。

今回は報告通りナルトと再会場面でーす!!

少しあれ・・・おもんないかも・・・

再会ってか!!

上忍だったが、あんま変わらず過している

まあ、まず久々に家帰ったら・・・

部屋が汚い

まあ、2年も放置してたらこうなるな・・・

つーことで打ち上げして夜8時ごろ帰ってきたが、まさかの大掃除

まず、水ぶきしてほつきではいて窓ふいて台所掃除して
便所掃除して

布団をナルトのんとあたしのんクリーニング出して

ついでに銭湯いって風呂はいつて寝るとこないから いの の家突
撃訪問して

お泊り2、3日して

よじやく家に帰ってきたのが今日

やっと2年前の生活に戻ってきた

「やっぱり自分の家って落ち着く!!」

あたしの家って風呂ないからわざわざ銭湯いってるんだよ……

まあ、それは置いてここ数日テマリがうちの里にいる

上忍試験が終わったら次は中忍試験・・・

かわいそうに係の人に当たったテマリとシカマル

でも最近あの2人いい感じだと思っけどなあ・・・

なんとなくベットに座っているあたし

たまたま机にある写真建てに目がいった

原作のやつでサクラの横にセツナがいると考えてください

あのと結局撮り直したんだよ写真

ま、姿変わったらねえ・・・

あたしの顔はやさしく笑っている

ミナトみたいな感じで

そーいやあたしの顔ってよく父さんに似てるらしい

2年前に両親に会ったけど、あたしが顔変わったのと真実知ったの
で精いっぱいだった
からあまりよく覚えてない・・・

時間見ると1時

「っと！いけない！！昼飯食べてない・・・」

いまさら作るのもなあ・・・

「久しぶりに一楽行こうっと！」

げふ！

食い終わったあと

一楽

うん！食った食った！！

やっぱりこんごつチャーシューおいし！

で横見る

電信柱にナルト立ってる

下に自来也さん、サクラ、木ノ葉丸その他

ウブんと……女の子って誰??

マジで知らない

「……」

どうして……このままスルー?

今から白と再不斬の墓参り行こうとしたんだけど・・・

「姉ちゃん！」

はい！見つかった

まあ会いたかったからいいけど！

「ナルト久しぶり」

そういいあの写真のようにやさしく笑った

でナルトは電信柱から降りてきた

サクラと木ノ葉丸、その他ガンスルー・・・

そしてナルトはあたしを抱きしめた

「たのむから・・・もう勝手にいなくならないでくねってばよ」

ありゃ・・・悪いことしちゃたな・・・

「じめんね。ナルト」

そして抱き返した

「で、ナルト身長伸びたね」

「へへー！姉ちゃんに勝ったってばよー！」

「いや・・・でもセツナお前本当に・・・美人になったのう。
尻も胸もバインバインだのう。」

「変態行為で訴えますよ？」

「いやいや！でも本当に美人になったのう・・・（こりゃ将来が
楽しみだのう）」

「ナルト兄ちゃん！」

でここからは原作通りで

「姉ちゃん今から何すんだ？」

「ナルトは綱手様のごとくでしょ？あたしは白と再不斬のお墓参りに
行ってくるね」

「分かったつてばよ」

で花買いたいけど、そうしたら1週間は生活できないから花なしで
行く

再会ってか!! (後書き)

はい!

次回 カカシVSナルト、サクラ、セツナ

墓参り（前書き）

話へんだろ！???

ってとこ普通にっついでください。

アニメしかやってないことも少しやるかも……です

墓参り

ここは、木ノ葉の里の墓が集まっているある場所

椿山 白

桃地 再不斬

そう書いてる墓の前に立っているあたし

さっそくバケツに水をくみその水で墓にそそぐ

「ごめんね。全然墓参りしてなくて・・・再不斬も白も花そえられなくてごめん
お金足りないから・・・」

そして墓をピカピカにしあげた

「・・・ねえ白。あたし強くなったかな？技とか封印術とかきわめて九尾のチャクラを

あやつれるように頑張って可能にして、医療忍術とかも少ないチヤ
クラでケガがすぐ治る
よう頑張って・・・」

あのあとから、どんなことがあっても泣かないと決めた

ちゃんと守ってるんだよ。

「でも・・・どうしても墓参りに来るときは切ない表情になっちや
うな。」

さてと・・・そろそろ帰って晩御飯の用意しなくちゃ・・・

「姉ちゃん！」

「あれ？ナルト。サクラも・・・2人そろってデートですかい？」

「ぶー!!」

「んなわけないでしょ!!セツナまで!!」

とかいって結構顔赤くなったりしてんだなこれが

「っで・・・何かよう?」

「今から第四演習場に行くんだってばよ!」

「修行の成果を見せるため、カカシ先生と戦うの!」

「おりゃまあ・・・懐かしいなあ・・・」

移動しながら話しています

「そつでしょ!?あたしたちが初めて集まった場所もそこだし・・・」

「

だね。」

「っと！着いたってばよー！」

「さすがカカシ先生まだ来てないね」

「っしょんなろー！まだ治ってないー！」

「もーっ！遅いってばよー！」

10
分後

「おっそろってんな」

「」「遅い！」（つてびねー）（つてびねー）」「」

「いやあ・・・今日は迷子になってしまった猫を見つけて・・・」
「はい！嘘！！」

「でも、先生にしては早い方だったわね」

「俺もそう思ってたよー」

「あたしも！」

「（俺完ぺきなめられたな・・・うん）さてと！勝負は俺からこの鈴をとってみる！」

鈴の数は3つ

あのころと変わってない

「ルールも2年前と一緒よね？」

「せーかい！まあ・・・あのころはサスケもいたがな・・・」

ズーン！！

「そうだってばよ・・・俺が弱かったばかり・・・ぶつぶつ」

「あたしじゃサスケ君を止められなくて・・・でもセツナだったら・・・うう・・・ぶつぶつ」

「あたしはサスケの言った言葉を信じるしか・・・がく！」

やっぱりあのとき止めとけばよかったのかなあ……

あのころのあたしって結構ばか？

今ごろ気づいたのかよ!!

そっくだよねえ……あのときサスケが言った”俺は里にまた戻ってくる”

っつていじめる……よ……

「あちゃー!こいつらの前ではサスケは禁句だな……」落ち込

んでも

始まらないだろ！？じゃあ行くぞ！！よい・・・スタート！」

墓参り（後書き）

次回やつと勝負です！

予定遅らせてすみません（<―>）

祝 お気に入り50件突破!! (前書き)

いやいやいや!! 久々に自分の小説検索してみたら50件超してる
じゃん!!

／(。□／)(／□。)／

これも、みなさんが見てくださっているおかげですm——(m

といついつで記念会?? やらせて頂きます!!

祝 お気に入り50件突破！！

「はい！というわけできましたきよし！！ついはこの小説お気に入
り50件突破っす！！」

「ちゅーわけでなんとなくパーティしてちょっとインタビューをし
たいっばよ！」

「あー！っと司会はあたしセツナとナルトでいかして頂きます！！」

「んーとまずカカシ先生！この小説が50件お気に入りされた感想

「は!???」

「え!???俺!??」

「だそつです!」

「え!???ちよつと姉ちゃん!?!それはさすがにひどすぎだつてばよ!」

「嘘だろおい!俺のセリフこれだけ!??」

「じゃあ次!自来也さん!?!」

「「ガンスルー!!」」

「感想かのう・・・まあ！わしはうれしいぞ！自分が活躍できる場面が増えてのう!!」がっはははり！
それにしてもセツナ・・・お前何回も言っが素晴らしいぼんきゅぼん！だのう!!」

「次言ったら殴り飛ばすんで。」

「姉ちゃん！抑えて!!」つと次は・・・んーとヒナタ!」

「え!??あの・・・と・・・とりあえず見てくださりありがとうございます。ごぞいます。

これからも見てください。 (いつ見てもナルト君の笑顔って暖かいなあ・・・) 「

「堅苦しいわねえ・・・ま!いいとして・・・何しよう!?!?」

「そつだよなあ〜!いきなり作者に記念会しろって言われてもな・・・」

「っておい!火影である私を忘れるな!」

「あー！忘れてたっばよ・・・」

「で感想は？」

「まあ私としてはだな・・・まだ50件だ！！ほかのは100とか200いつてんだろ！？」

「この小説も100とか200いけ！！」

「そこは作者の問題です。」

「とういわけでいきなり飛び出てジャンジャッジャーン!!作者だ
よー!」

「うわー!出たあー!」

「ナルト・・・作者にそれはないでしょ!???出番減らすぞー!」

「じゃあここで作者の好きなナルトの歌とか!」

「オープニングは・・・ブルーバードとかホタルノヒカリとか?!
!のやつ

エンディングはfor youとforeverとか!」

上の英語が読めない人はおうちの人にきいてみよう!

「好きなナルトの編!?!は」

「ペイン!!!!!!!!!!」

「好きなキャラは!?!」

「サクラ以外」

「ひどいってばよ!?!」

「ここだけの話・・・ナルトには悪いけどサクラのどういふところが嫌いって!?!」

「サクラがナルトに嘘告したやつあるじゃん!?!あの件についてはほんまいや!」

「嫌いになった理由の一つ!?!もう一つは泣きすぎ人間泣いたら終わりとか思うな!」

「はい！見てる人今作者いったこと忘れるように！」

今の話しはナルトには聞こえてません

「じゃあ一応このへんで・・・」

「ってちょっと待ちなさいよお！！なんであたしだけパーティーに呼ばれてないの！？
「しゃんなろー！」

「それではまた次回（*^^^）v」

久々に手合せだ！（前書き）

はい！やっとカカシとの勝負？です

じゃ行きますか

久々に手合せだ！

カカシ先生のスタートによってみんな隠れた

さてさて・・・

鈴とつたらジ・エンドだから少しカカシ先生と遊びたいから
始めは少し本気を出させて頂きますか

で隠れてた場所が三人そろって同じ……

「えらくすごい偶然ね……」

「うん」

「まあ、不自然だけどセツナがいたらだいぶと楽ね。みんなで協力して作戦立てるわよ」

「まあ……今回は本も読んでないし、写輪眼開眼してるし少しやっかいね」

「1111が見つかるのも時間の問題だわ」

「ヤジするんだってばよ？」

「楽しいおしゃべりはそこまでするしよっか？」

「んげ！カカシ先生だってば」

「当たり前よ。サクラもナルトも何べっクリしてんの？…気配も消せ
ずしゃべってたらばねんに
きまつてるでしょ」

2人とも”あ！！”って感じ

まあ、ここで修行の成果見せてやる！

「水遁 水流弾の術！」

バツシャアアア！！

さすがはカカシ先生・・・よけたな

「見つけた！っしやるろー！！」

「おっとー！」

「おっとー！」

「あぶね……あれは綱手様直伝怪力……おそるべし」

「よそ見してる暇なんかねえってばよ！」

「何!？」

ナルト……虎の印……

まさか!？

「でおりゃあ！」

「おっとー！」

すか！

普通によけられた

「いや……いまのはマジで危なかったな。別の意味で」

あれって絶対木ノ葉千年殺し（カンチヨウ）だよね……

ナルトは火遁使えないし

さて……作戦を練るとしよう

「水遁 水霧」

「な！？？」
（霧がでた）

「前がみえねえってばよ！」

「本当に真っ白……」

でこの間にサクラとナルトを連れ出す

「あれ！？見えた・・・」

「って姉ちゃん！！」

「し！今のはあたしの術よ。でもあの霧だつて少しの時間稼ぎにすぎない。

相手がカカシ先生となるとね・・・」

でそこからナルトとあの作戦を立てるといっわけです*^^^
(
v

久々に手合せだ！（後書き）

なんの作戦かは・・・

分かりますよね？

ヒントは

カカシが読んでるあの本っです！

イチャイチャタクティクス（前書き）

タイトルからしておかしいよね ^ m ^

作者は期末テストの勉強で疲れております

それでは本編へ!!!

ヒッハー!!!

イチャイチャタクティクス

はい！原作通りあの作戦でカカシ先生に立ち向かおうということ
です！！

「ナルトの発想通りで行くんで・・・じゃあみんなついてきて!!」

「了解だつてばよ!!」

「OK!!」

そろそろ水霧の術の効果が薄れてきている

「!!」

あたしは急いで後ろに”とまれ”の合図を送る

「どっしたってばよー!..?」

「あそこ・・・見て」

カカシ先生があたしたちを探している

「ぜっこのうのチャンスってわけね!」

「そっさいじつとー!じゃあみんな行くよー!..!」

アホみたいに飛び出てナルトが大声で

「イチヤイチャタクティクスの最後に実は主人公が……」

カカシ先生はネタバレがいやなんで耳ふさいで写輪眼も閉じてくれました？

「いや・・・まさかこれが敗因だなんてな・・・」

「カカシ先生。本は最後まで見ましようね。」

「そうだってばよ!!」

「うんうん。」

以上！カカシとの戦いでした

イチャイチャタクティクス（後書き）

次回からは任務 暁との接触事件？について書きます！

いぞー！！砂隠れの里へー！！（前書き）

はい！！

じゃあ行ってみよー！

いざー！ー！砂隠れの里へー！ー！

次の日

待ち合わせ場所にナルトと一緒に行きましたー！ー！

「いやー・・・久しぶりの任務だつてばよ!」

「うん!..あたしも!..」

「それにしてもカカシ先生・・・遅いわね・・・」

「いつもの事だけど」

「やあ!諸君おはよう!..!今回は真面目に書類書いてたら遅れまし
た。」

パ
タ
パ
タ

「
「
「
遅い……」
「
」

空を見ると砂隠れの鳥・・・確か一番はやい奴!!

しかも緊急用!?

何かあったのかしら・・・???

「姉ちゃん！カカシ先生！早くいくつてばよ！！」

「うん」

「ああ」

任務受付

で任務がCランクで綱手様に文句を言ってるナルト

まあ……予想通りってことで

するといきなり、ドアが開いた

「綱手様！大変です！！」

「なんだ？」

そついい綱手様に巻物を渡す

しばらくすると、綱手様の顔つきが変わりこつ言った

「カカシ班！任務変更だ！！夕べ 砂隠れの里に暁が現れ風影を連れ去った。

向こうは助けを求めている。ただちに砂隠れの里へと向かい、砂の忍びの言うことに
従え！！」

「はい……」

で超ダツシユで木ノ葉の里を出て行つたらテマリと会い事情を話し
ともに行動することに

・
・
そうすると、サクラがナルトに九尾や暁の事を問いそれにこたえる・

という感じで砂の所へ行ったが・・・

砂嵐に巻き込まれたー!!!

まさかの!？

まあ・・・疲れてたからいいんですけど・・・

ナルトはじっとしてられないね・・・うん。

いざー!!砂隠れの里へ!!(後書き)

短いですが、すんまえん!!

やっと着いた　！！と思ったらまた忙しー！！（前書き）

えー、みなさんに報告です。

そろそろあたるの学校期末なんで・・・

12月まで更新できないと思います

ご了承ください。

やっと着いた　！！と思ったらまた忙しー！！

砂嵐がやっと過ぎ去ってあたしたちは急いで走って

なんとか着きました（＾Ｏ＾）

いや・・・マジで疲れた

砂漠って結構暑いしねー・・・

で着いたら着いたで、砂の人に集中治療室に連れて行かれた

そこには原作通り、カンクローウがサソリの毒にやられていた。

悲鳴からしてありゃもう結構いつてるな・・・

「だいぶ重症ね・・・持って1日ってとこまで毒がきてる。」

「お前・・・叫び声だけで判断できるのか??」

チヨばあさんが話しかけてきた。

と思いきや、カカシ先生を白いキバと勘違いするし・・・

ナルトも暴れてる？し・・・

でもカカシ先生って白いキバの息子だからねえ・・・

「うるさい！！騒ぐのあとにしてください！！！！サクラ！！ポケーとしてないで

2年間の修行の成果を見せてみなさい！！！！」

サクラは、はっとして

「。じん。じん。」

と
い
っ
た

悲鳴からしてかなりやばい・・・

一応手をかざしてみる

! ! ! !

もう、心臓まできてる・・・

毒が全体にしみてるし・・・

「じゅおおおお……！」

えーい！！考えてる暇はない！！

「みんな！！カンクロウ抑えて！！！！」

みんなは抑える

「カカシ先生もナルトも……強く抑えてよ……もたもたしてたら死ぬわよ……！」

カカシ先生とナルトは急いできて、みんな力を強めた

どしどし……って……？

この2年 忍術、体術、封印術、医療術・・・

そして九尾のチャクラを抑える修行をバカっというほどしてきた

ついに毒を道具なしで抜けるようになった

毒だけじゃない。

異常状態すべて

まず、カンクロウの体に毒が入ってきた場所付近からどんどん毒を治していく

そして最後のトコだけ

「ボウル持ってきて!!!」

そして触らないようにその毒をボウルに静かに入れる

「よし!!!これで毒は消したわ。あとはこの抜き出した毒を調べて薬を作るわ。サクラ手伝って」

「……うん。」

「サクラは何もできなくて、落ち込んでる」

「ナルト、カカシ先生ありがとう。」

「「あ……ああ……」」

「サクラ、あたしは念の為カンクロウについでる。

サクラは薬を作って!!

綱手様の横にいたんでしょ??」

あたしは笑ってみせた。

サクラは、はっとして

「..」

と決意した顔を見せた

やっと着いた　！！と思ったらまた忙しー！！（後書き）

なんか・・・チートすぎたかも・・・

サクラファンの人すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3046w/>

-NARUTO-転生

2011年11月23日20時55分発行